

第5章 表面採取遺物

第1節 遺物の採取状況

朝臣山古墳群では、1970年の現地踏査における埴輪片採取を嚆矢として、平成6年（1994年）度～平成8年（1996年）度の御津町教育委員会による分布調査（図1）、2019年の事前視察と伐採作業、2020年の伐採作業ならびに測量調査の際に、土師器・須恵器・埴輪と鉄器片を採取している。これらの多くは古墳に供献されたり樹立されたりしたものとみることができるので、古墳の築造時期を推定する一次資料である。なお、資料を採取した位置は、4号墳の墳丘斜面や墳丘裾に加えて墳丘よりも下った位置、5号墳の墳丘裾付近や墳丘裾よりも西側、7号墳の墳頂や墳丘裾付近の列石部分、さらに墳丘裾よりも南側・西側に下がった場所である（図2・3）。

現在確認できる資料数は、たつの市教育委員会所蔵のものも合わせて88点を数える。もっとも、このほかにも採集しながらその資料を公表していない人もいるので、総数はさらに増える。

朝臣4号墳の埴輪については、図4に引用したように、たつの市教育委員会所蔵の破片2点の実測図がすでに公表されている（注1）。今回新たに土師器3点、須恵器20点、埴輪（埴輪か土師器か判断しにくいものを含む）52点の合計75点を実測した。ここでは、その内の62点を図示する（図5・7・10・15・18）とともに写真を掲載している（図6・8・9・11～14・16・17・19）。また、残りの13点と鉄器片は写真のみ紹介している（図20・22～24）。図5は4号・5号墳に関わる土師器・須恵器12点（1～12）、図7は4号墳に関わる埴輪8点（13～20）、図10は5号墳に関わる埴輪21点（21～41）、図15は7号墳に関わる須恵器・埴輪15点（42～56）、図18は4号墳ないし5号墳に関わるものの採取位置を特定できない埴輪6点（57～62）、図20は4号墳ないし5号墳に関わる小片13点（63～75）である。以下、実測図・写真に加えて遺物観察表（表1～6）を示して概要を述べる。なお、遺物観察表には、個々の色調や胎土、焼成状況などを記載し、採取位置が特定できているものは、遺物表採場所を示す図2（4・5号墳）・図3（7号墳）と同じ番号を付記している。また、遺物実測図と遺物写真・遺物観察表の番号は一致している。

（注1）芝 香寿人・中溝康則 1997『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』兵庫県揖保郡御津町教育委員会



図1 1996年分布調査時の4号墳の埴輪確認状況

※1996年1月7日の分布調査時、4号墳での取り上げ前の朝顔形埴輪片（口縁部と胴部）の写真。場所は図2の4号墳③西側の崖で、現物はたつの市が保管している。実測図は『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』に掲載されている（第4図参照）。

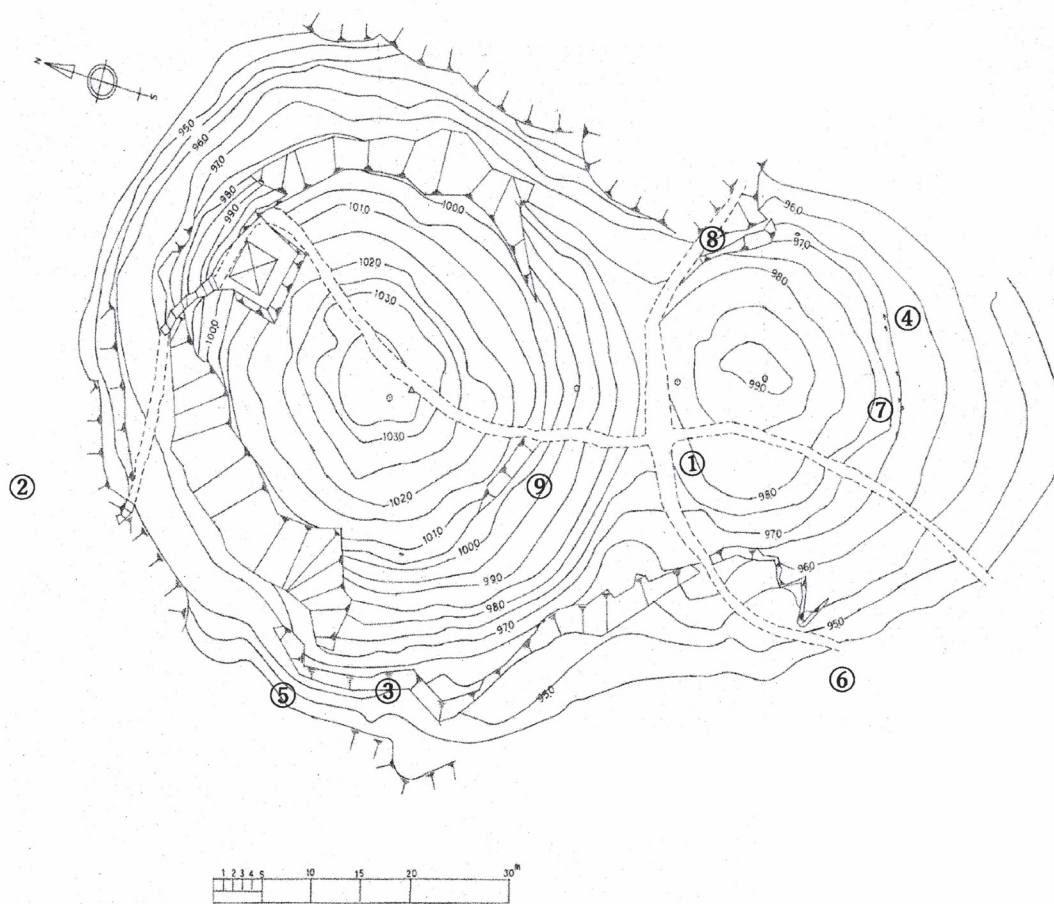


图2 4号・5号墳遺物表採場所

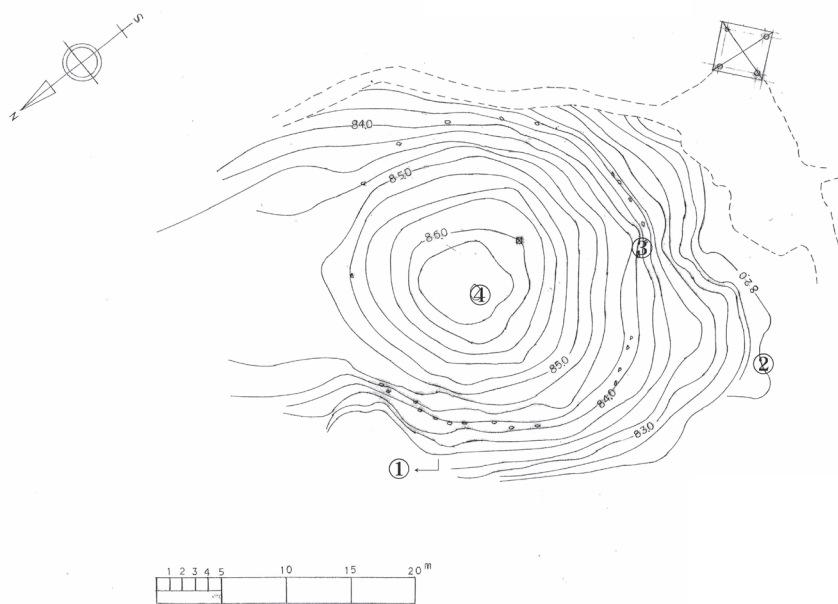


图3 7号墳遺物表採場所

朝臣4号・5号墳

- ①…12・21・22 (5号墳 山道と里道交差付近)
 - ②…19・20・63・64 (4号墳 北側の外)
 - ③…図1・図4参照 (4号墳 西側の崖。現物はたつの市が保管)
 - ④…28 (5号墳 南東部列石付近)
 - ⑤…18 (4号墳より西下)
 - ⑥…40・41 (5号墳より西下の里道)
 - ⑦…1・2・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39 (5号墳 南側列石付近)
 - ⑧…23・24・25・26・27 (5号墳 北東部の崖付近)
 - ⑨…11・13・14・15・16・17 (4号墳 南西下)
- 下の道…8・9・10 (古墳に伴わない可能性あり)
- 場所不明…3～7・57～62・65～75 (但し、4号・5号墳は間違いなし)

朝臣7号墳

- ①…52 (7号墳より西下。古墳に伴わない可能性あり)
 - ②…53 (7号墳より南西下の道)
 - ③…45・46・47・48・49・50・51・54・55・56 (7号墳 南側列石付近)
 - ④…42・43・44・鉄器片 (7号墳 墳頂)
- ※○囲い数字は図2・図3の遺物表採位置を、ゴシック体の数字は遺物報告番号を示す。

第2節 土師器・須恵器

ここでは4号墳・5号墳に関わる須恵器9点(1～9)と土師器3点(10～12)、7号墳に関わる須恵器11点(42～52)について述べる。これらはいずれも小片だが、器種構成や焼成状況に当地域の特徴を読み取ることができる。

1) 4号墳・5号墳に関わる須恵器・土師器

採取位置が明らかなのは、5号墳の南側列石付近で確認した1・2と4号墳南西下で確認した11、5号墳の4号墳寄りの墳丘裾(山道の里道交差付近)で確認した12の4点である。また、8～10は4号墳からやや離れた西側の山道で採取した。一方、3～7は、採取位置を特定できないが、4号・5号墳付近であることに間違いのないものである。

5号墳に伴うとみて大過ない1・2は、須恵器壺の口縁部片と体部片である。1は、緩やかに外反する口縁部外面に突帯を1条貼り付けたもので、焼成は良好・堅緻。断面はサンドイッチ状に褐色がかっているが、黒っぽいガラス質鉱物がみえるなど、花崗岩バイラン土(風化土)に起源をもつ胎土を用いていると推測できる。この胎土の特徴は、他の個体にも通じる(注1)。2も焼成は良好・堅緻で、断面に部分的にサンドイッチ状の部分がある。外面は灰が融けてざらついているため調整は不明だが、内面は当て具圧痕をナデ消している様子が観察できる。1・2ともに、5世紀前半の初期須恵器である(注2)。

3～7はいずれもきめの細かい良質の胎土を用いた壺の体部片である。焼成のややあまい3は、シャモット(土器を粉にした混和剤)らしい灰色～褐色の斑点が見える。焼成の良い4は長石・石英

を含む胎土でガラス質が融けているため、つるりとした独特の手触りである。タタキ成形の外表面には幾筋も線があり、カキメとヘラ描き直線文のようにも、ハケ調整のあとにカキメを施したようにも、さらにはハケないクシで格子状の文様を描いたようにもみえる。相生市宿禰塚古墳で採集されている須恵器片には、ハケないクシを用いて格子状の文様を付けたものがある（注3）ので、それに近いものかもしれない。5と7は、ともに鉄分が高温で融けた黒ゴマがみられるもので、同一個体である。ただし、写真撮影時には接合できることに気がついていなかったため、図6の写真は接合前の状態である。外表面には自然釉や灰が付着しているため調整を観察できないが、内表面は無文当て具痕にナデを加えている。やや薄手の6は、長石・石英が融けて断面もしっかり還元しており、高温で焼成されたことがわかる。外表面は灰が融けてざらついているために調整を観察できないが、内表面はナデによって平滑に仕上げられている。3～7はいずれも厳選された胎土を用いて丁寧に作られ、高温で焼成された初期須恵器である。

8は外表面を中心に内面や断面の一部に二次焼成による煤が付着しており、外表面はいくらか磨滅している。外表面に沈線とクシ描き波状文を併用していることから、初期須恵器の壺（台付壺）の肩部とわかる。上部の沈線の上には上下の振り幅の小さな波状文、上部と下部の沈線の間には2パターンの波状文が描かれている（図21）。沈線間の波状文の内、上側のものは上下の振り幅の小さな波状文であるが、下側のものは上下の振り幅が大きくて「V」や「U」に近い雑なもので、この2パターンの波状文を併せて流水文のように仕上げている。この文様は、赤穂市蟻無山1号墳の須恵器器台や赤穂郡上郡町竹万宮ノ前遺跡、たつの市小畑十郎殿谷遺跡出土の須恵器に施されているものの、陶邑窯跡群に類例がみられないことから、中久保辰夫氏が「回転力に頼ることなく、手首を上下に動かして流水文のように描いている」波状文（注4）、荒木幸治氏が「流水文状の波状文」（注5）や「密な波状文」（注6）と表現している西播磨（揖保川水系・千種川水系）特有の波状文（注7）を退化させた文様と理解したい。尚、焼成はややあまく、断面は部分的にサンドイッチ状を呈する。9は外表面に格子タタキメ、内表面に明確な同心円圧痕のある甕体部片である。長石が融けるほど高温で焼かれており、外表面は自然釉による光沢がある。タタキメや当て具痕の様子から6世紀に下ると考えられるので、他の須恵器より新しい。出土位置を勘案すると、9は4号墳・5号墳に伴わない可能性が高い。

土師器10～12は、壺ないし甕の体部片であろう。磨滅や剥離のために器壁の調整を観察しづらいが、11の内面にわずかながらヨコハケが観察できる。しかし、これらは4号墳・5号墳の年代の根拠としては不十分である。

2) 7号墳に関わる須恵器

これらはすべて採取位置がわかっており、42～44が墳頂付近、45～51が墳丘南側裾の列石付近、52が墳丘裾よりも西側に下がった場所である。

7号墳に伴う可能性が極めて高い42～44は、42が器台の脚部片、43・44が甕の体部片で、いずれもきめの細かい良質の胎土を用いており、焼成良好・堅緻である。42は2条の突帯が巡り、その下にクシ描き文を施す（図21）。また、突帯の上と下に位置をずらして透し孔があり、下の透し孔は明らかに長方形であるが、上の透し孔は円形ないし三角形のようにもみえる。クシ描き文は、一見波状文のようであるが、スパンに長短があるので組紐文であろう。また、透し孔のすぐ左側

にはクシの静止痕も見えるので、分割技法の可能性が考えられる（注8）。尚、外面を中心に煤化がみられるので、二次焼成を受けているようである。ところで、二条の突帯を単位とする特徴は、先に挙げた蟻無山1号墳の器台（第6章図3参照）や宿禰塚古墳の台付壺（第6章図4参照）に通じる。43は、4や6に似た極めて緻密な胎土で、しっかり還元している。外面は降灰が融けてテカリがあり、内面は磨き上げたように滑らかな手触りが特徴的である。内面にはうっすらと同心円状の圧痕がみえるが、これは同心円圧痕をナデ消したりハケ調整を施したりしたものではなく、使用によって年輪が浮き出した無文当て具の痕跡であろう。同様の痕跡は後述する49にもみえる。胎土にゴマが多くみられる44は、外面の平行タタキメをナデ消し、内面は無文の当て具を使って成形した後にナデで仕上げている。彎曲は極めて緩やかで、大甕であろう。

45～51は、45が壺または甕の小片、46が壺またはハソウの口縁部片、47が壺または甕の頸部片、48が壺体部片、49～51が甕体部片で、焼成状況にばらつきがある。45は内面が剥離していて、外面調整はケズリのようにみえる。46は43と同様に極めて緻密な胎土で、暗褐色を呈する外面やサンドイッチ状に色調変化のある断面は磁器を思わせるほど硬質でとても滑らかである。外面には2条の突帯とクシ描き波状文が巡っている（図21）。中溝康則氏は、天地逆の脚台の可能性を考えているが、内面の均質で厚みのある自然釉や端部への屈曲の様子から、口縁部片とみる。緩やかに外反しながら立ち上がる47は、外面が褐色に発色しており、備前焼など中世の焼締陶器のようにもみえる。しかし、シャモットらしい褐色粒を含む胎土の様相から、還元が不十分な須恵器といえる。48は、良質の胎土で断面はサンドイッチ状を呈し、焼成は良好・堅緻である。内面は無文当て具痕とナデがみえ、外面には平行タタキメをナデ消してカキメを加えた後にヘラ描きによる斜格子文を施している。尚、上端部の線刻の様子から、鋸歯文の存在も想定できる。49は外面に平行タタキメを加えているが、原体の木目のためか、格子タタキメのようにみえる部分がある。内面にはかすかに同心円に似た圧痕がみえる。ただし、圧痕をナデ消した痕跡が全くみられないので、43と同様に無文当て具痕の木目がうっすら写ったのだろう。また、50・51は外面に平行タタキメがみられる。焼成は、49・51が焼成良好なのに対して、50はややあまい。甕の場合、外面の平行タタキメをナデ消さないものがタタキメをナデ消すものより新しく位置付けられるので、49～51は、44よりやや新しい傾向がある。ただし、42～51のいずれも、初期須恵器の範疇で捉えられる。

52は、自然釉の付着が顕著な甕または壺の口縁部片である。5世紀の資料といえるが、出土位置が7号墳から離れているので、7号墳以外の古墳に伴うものかもしれない。

3) 小結

以上のように、須恵器は壺が多く、甕と器台を含むが、杯は認められない。土師器は甕または壺とみられる。各古墳の築造時期は、4号墳・5号墳に直接伴うとみられる須恵器1～8や7号墳に伴う42～51が初期須恵器であるので、5世紀前半といえる。また、これらの胎土や色調は陶邑のものとは異なるので、陶邑から供給されたものではなく、播磨の胎土を用いた在地の窯のものと考えられる。時期についてさらに絞り込むと、前者については、4の施文が宿禰塚古墳例の文様に通じること、8の波状文が蟻無山1号墳の器台の波状文の退化したものと理解できることから、TK216型式の可能性が考えられる（注9）。また、後者については、外面のタタキメをナデ消して

いる44が幾分古い様相を呈しているが(注10)、平行タタキメを残す甕片49～51がみられるので、必ずしもTG232型式まで遡らせる必要はない。むしろ、42が蟻無山1号墳の器台や宿禰塚古墳の台付壺と親近性をもっていることや、クシ描き文を分割技法の組紐文とみることから、宿禰塚古墳と同様にTK216型式頃といえよう。したがって、5世紀第2四半世紀と考えることができる。

尚、これらの初期須恵器は、総じてきめの細かい緻密な胎土を用いており、焼成はすこぶる良好である。したがって、材料の選別・成形・築窯・窯焚き等、極めて高い技術をもつ須恵器生産集団の手で作り出されたものであることがわかる。

- (注1) 胎土に含まれる鉱物の種類や状態、焼成状況については、田中清美氏に実見いただき、詳しい助言を頂いた。
- (注2) 「初期須恵器」は、TG232型式、ON231型式、TK73型式、TK216型式、ON46段階に属する須恵器を指す。尚、これらの型式の年代や時期区分、編年については、第6章図1に「埴輪の変遷図」を引用した鈴木一有 2014「野中古墳の築造時期と陪冢論」『野中古墳と「倭の五王」の時代』〈大阪大学総合博物館叢書10〉高橋照彦・中久保辰夫 編 大阪大学出版会 に拠っている。
- (注3) 荒木幸治 2016「特別展 蟻無山古墳の時代—播磨に渡来人きたる—」『有年考古 第3号—赤穂市立有年考古館年報(平成26年度)—』〈赤穂市文化財調査報告書83 赤穂市立有年考古館報告書第3冊〉赤穂市教育委員会・赤穂市立有年考古館 72頁には、須恵器片の写真が掲載されており、その中にハケないクシによる調整とみられる破片が含まれている。
- (注4) 中久保辰夫 2010「渡来文化受容の地域格差—古墳時代中期の播磨地域を中心に—」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 編
- (注5) 荒木幸治 2011「第1章 蟻無山古墳群の測量調査」『蟻無山古墳群・塚山古墳群・周世宮裏山古墳群測量調査報告書Ⅱ』〈赤穂市文化財調査報告書73〉赤穂市教育委員会
- (注6) (注3) と同一文献。
- (注7) (注3) ならびに(注4) と同一文献。
- (注8) 中久保辰夫 2014「野中古墳出土土器の性格と意義」(注2) と同一書籍に収録 によると、組紐文は連続技法から分割技法へ変化する。野中古墳の須恵器にみられる組紐文はすべて分割技法で、TK216型式期と考えられている。
- (注9) (注3) では、「(陶邑古窯跡群で)TK73型式以降の器台のほとんどは、ロクロ回転を用いた波状文だけが施されます。そのため、蟻無山1号墳出土の高杯形器台はTK73以前の須恵器と考えてよさそうです」(65頁)と蟻無山1号墳の築造時期をTK73以前としている。また、宿禰塚古墳については「須恵器の型式は、文様からTK216型式と評価されており、蟻無山1号墳より若干新しいようです。」(71頁)と、TK216型式の築造とみている。
- (注10) 和歌山県立紀伊風土記の丘 2014『須恵器誕生—新しい土器は古墳時代をどう変えたか—』では、甕胴部外面のタタキメを消すものをTG232型式、甕胴部外面のタタキメを残すものをTK73型式と区分している。

第3節 埴輪

埴輪片は4号墳の墳丘斜面や墳丘裾に加えて、墳丘よりもさらに下った位置、5号墳の墳丘裾付近、7号墳の墳丘裾の列石付近やそれより下がった位置で採取されており、合計54点を数える。以下に、これらの概要を述べる。

1) 4号墳及びその周辺

図7は、合計8点の埴輪である(13～20)。13～17は墳頂に近い斜面で採取されたもので、ほぼ原位置を保っているとみなせるが、18～20は墳裾やそれよりも下に転落した遊離資料である。ここでは、円筒埴輪に加えて朝顔形埴輪の口縁部片2点(17・20)がみられるほか、突帯の剥離痕跡があって形象埴輪の可能性のあるもの1点(14)がある。

円筒埴輪片は直径30cm前後のもの(16・18・19)に加えて、直径約40cmのもの(15)があり、後述する5号墳の埴輪よりも大振りである。口縁部片の13は、わずかに端部が外側に屈曲してお

り、内面・外面ともにヨコハケで仕上げている。赤穂市教育委員会の荒木幸治・山中良平両氏からは、須恵器と埴輪を併焼していた相生市那波野丸山3号窯の資料に似ているとの指摘があった。突帯の残る15は、外面に1次調整のタテハケ、2次調整のヨコハケを施したもので、使用しているハケ原体が幅の狭いものであるため、A種ヨコハケに似ている。また、内面調整にも同じ原体を用いており、こちらはタテハケである。他の破片は磨滅が進んでいるが、かすかにハケ調整が残るものがある。突帯の断面形態は、15・16が幅が狭くて突出のやや高い方形で、18・19は台形である。尚、16には透し孔がみられる。

焼成状況は、良好な土師質のものが多く半須恵質焼成は少ないが、黒斑をもつものはみられない。土師質焼成の埴輪の色調は、褐色がかかったものや黄灰色のものが目立つ。なお、16と20は褐色粒を大量に含む独特の胎土で、他の個体とは異なる。また、18は、外面に赤色顔料が塗布されている。

図4として引用した実測図には、4号墳の西側の墳丘裾崖付近で採取された朝顔形埴輪の杯部片1点と、突帯と透し孔を有する円筒埴輪の体部片1点が掲載されている。朝顔形埴輪は内面にヨコハケがみられる。円筒埴輪は、外面に1次調整のタテハケ、2次調整のヨコハケを施し、内面はナデと斜め方向のハケ調整である。この円筒埴輪の復元径は直径25cm前後と小振りだが、朝顔形埴輪の杯部とともに採取されていることから、朝顔形埴輪の円筒部かもしれない。

2) 5号墳及びその周辺

図10は合計21点の埴輪である(21~41)。21~27は4号墳寄りの墳丘裾、28~39は墳丘南側裾の列石付近、40・41は墳丘よりも西下の里道で採取されたものである。円筒埴輪片が大半を占めるが、37~39は形象埴輪片と考えられる。また、基部である41は、小型円筒埴輪ないし形象埴輪の可能性がある。

円筒埴輪片は、半須恵質焼成で残存率の高いものが多く、調整や突帯の形態が観察できる。法量については、直径20cm前後のもの(21・23・24・29)と直径30cmを超えるもの(30・31)がある。調整が観察できるものは、外面については1次調整のタテハケに2次調整のヨコハケを加えている。内面は、ナデや指オサエが主流であるが、29はタテハケを施している。尚、1次調整と2次調査では同じ原体を使用する傾向がある。ちなみに、突帯剥離痕に1次調整のタテハケが残っている25のハケ原体は20~22本/cm、1次調整と2次調整が明確にみられる26のハケ原体は16本/cmと目が細かいが、36のハケ原体は5~6本/cmと粗く、使用されている原体は多様である。また、2次調整のヨコハケをみると、23・26に明確な静止痕は認められないが、29にはかすかに静止痕が観察できる。

突帯の断面形態は、磨滅が顕著な32~34を除くと台形ないしM字形で、23・31は突帯貼り付け時のヨコナデに回転力を用いている様子をはっきり観察できる。29は突帯上面の条線が顕著である。21の残存部上端は、粘土紐接合面で剥離している。また、21・25には円形透し孔がみられる。

尚、口縁部片である28は緩やかに外に開く形態である。基部である41は内面・外面の指オサエによって、端部が肥厚している。

埴輪の色調は、半須恵質では橙色のものが多く、土師質焼成の埴輪は視認色がベージュのもの

が中心である点が4号墳と異なるが、21・28のように視認色が褐色のものや、橙褐色の32のように特徴的なものもある。また、厚さの変化が著しく形象埴輪片とみた38・39は、視認色がベージュ色であるが、胎土にはシャモットの可能性のある褐色粒を多く含んでいる。なお、黒斑のある個体は認められない。

3) 7号墳及びその周辺

図15の4点である(53~56)。54~56は墳丘南側裾の列石付近、53はそれよりも南西に下った位置で採取されている。このうち、小片の54は外面にわずかながら線刻がみられるので、形象埴輪かもしれないが、他の3点は円筒埴輪片で、ヨコハケやヨコナデで外面を仕上げている。

53の法量は直径30cm程度で、56はそれよりやや小さく直径約25cmである。56は、断面方形の突帯を有しており、突帯貼り付けに伴う回転ナデが明瞭である。土師質焼成の55は口縁部片で、13に似た端部形態である。尚、土師質焼成の53・55と半須恵質焼成の54は、5号墳の埴輪と同じ色調であるが、半須恵質焼成の56は、外面が灰褐色、内面が橙色で、内面と外面で大きく色調が異なっており、窖窯焼成であることがはっきりわかる。

4) 採取地点不明の埴輪

図18の合計6点(57~62)で、いずれも土師質焼成の円筒埴輪小片である。このうち、57~60は1970年3月17日に採取されたことが記録されている。61の外面には静止痕を伴うヨコハケがみられる。

5) 写真のみ掲載の埴輪

図20の合計13点(63~75)で、概ね円筒埴輪片であろう。いずれも土師質焼成であるが、磨滅が顕著で調整は観察できない。尚、4号墳北側の外で採取された63・64だけは、にぶい褐色やにぶい黄褐色(視認色褐色)で、他の破片とは様相が異なる。

6) 小結

以上、朝臣4号墳・5号墳・7号墳の埴輪には、円筒埴輪だけでなく、朝顔形埴輪と形象埴輪が存在していたと考えられる。その時期については、黒斑をもつものが1点もなく、すべてが窖窯焼成といえることに加えて、透し孔の形態やハケ調整の様相、突帯の形などから、5世紀中頃といえる。さらに絞り込めば、概ね5世紀第2四半期に収まるだろう。つまり、古墳に伴うとみなした須恵器と同様に、5世紀初頭までは遡らないが、5世紀後半にも下らないものである。

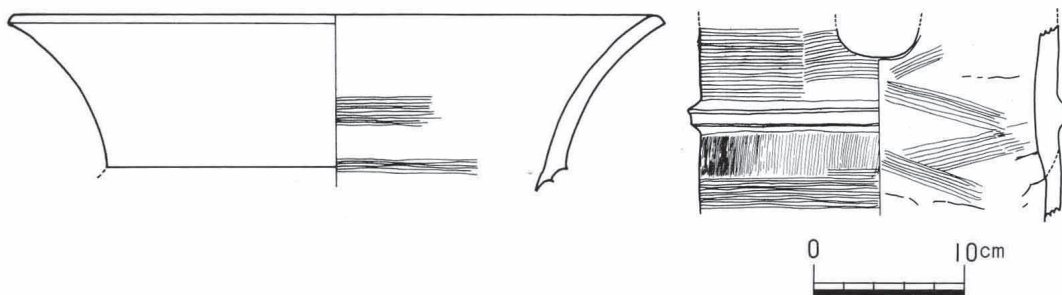


図4 1996年分布調査時の4号墳採取埴輪 (S: 1/5)

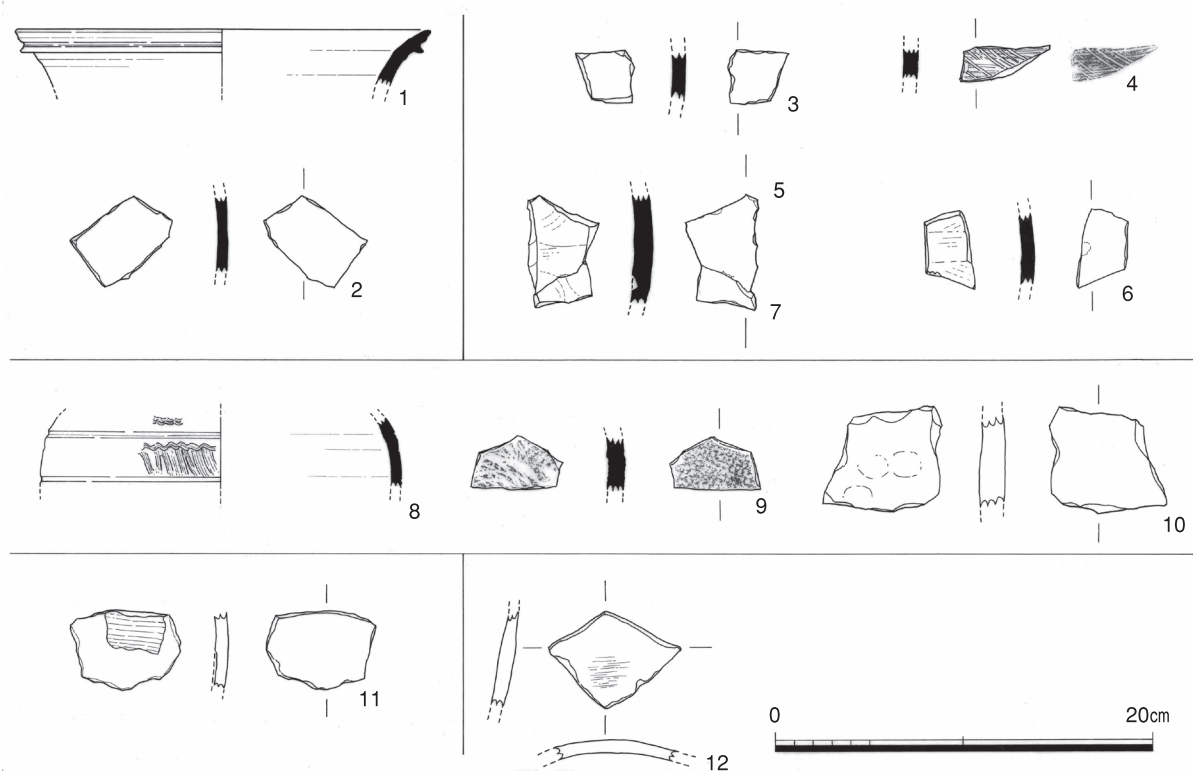


図5 4号・5号墳採取土師器・須恵器実測図 (S: 1/4)



図6 4号・5号墳採取土師器・須恵器写真

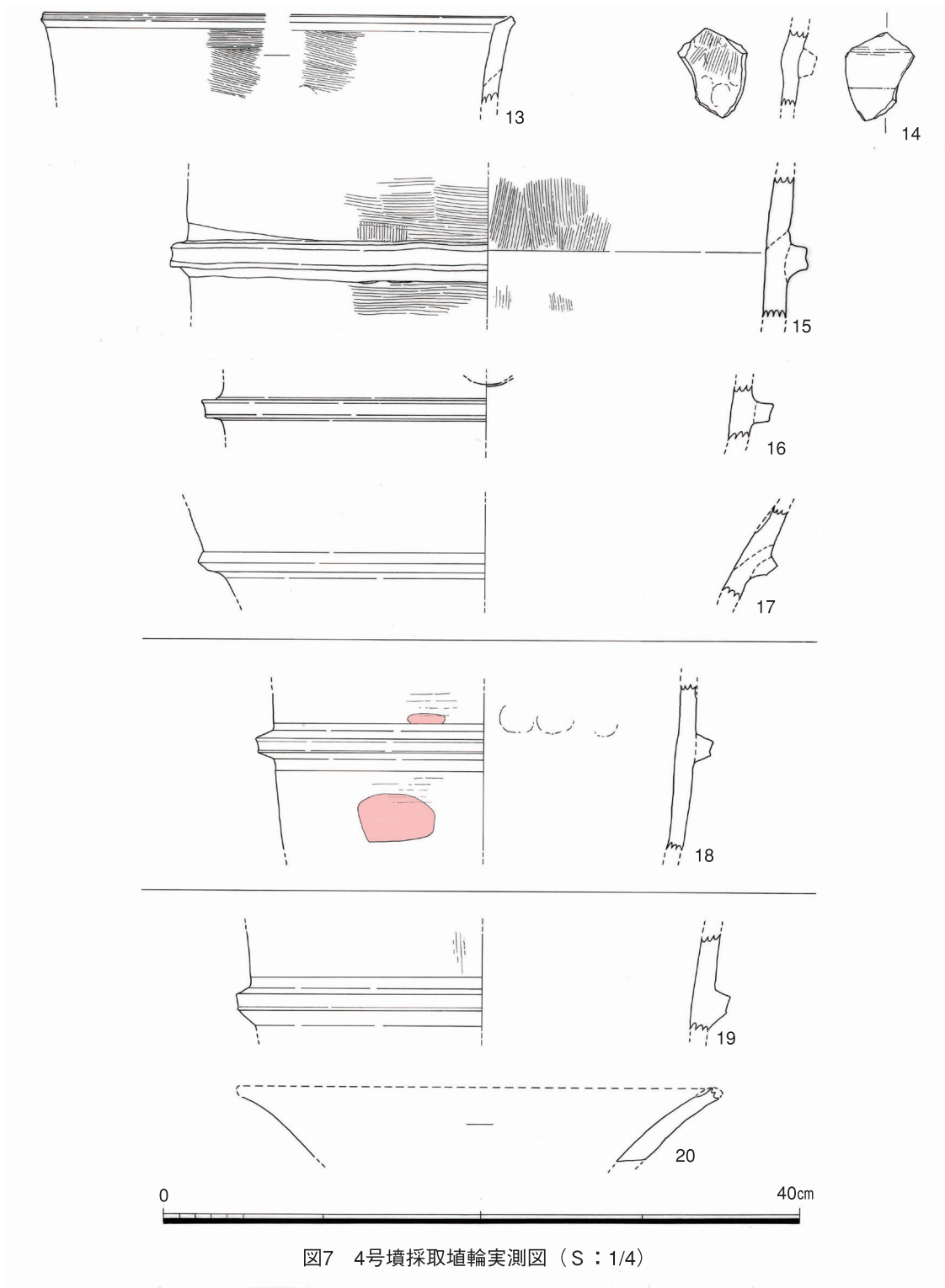




図8 4号墳採取埴輪外面写真



図9 4号墳採取埴輪内面写真

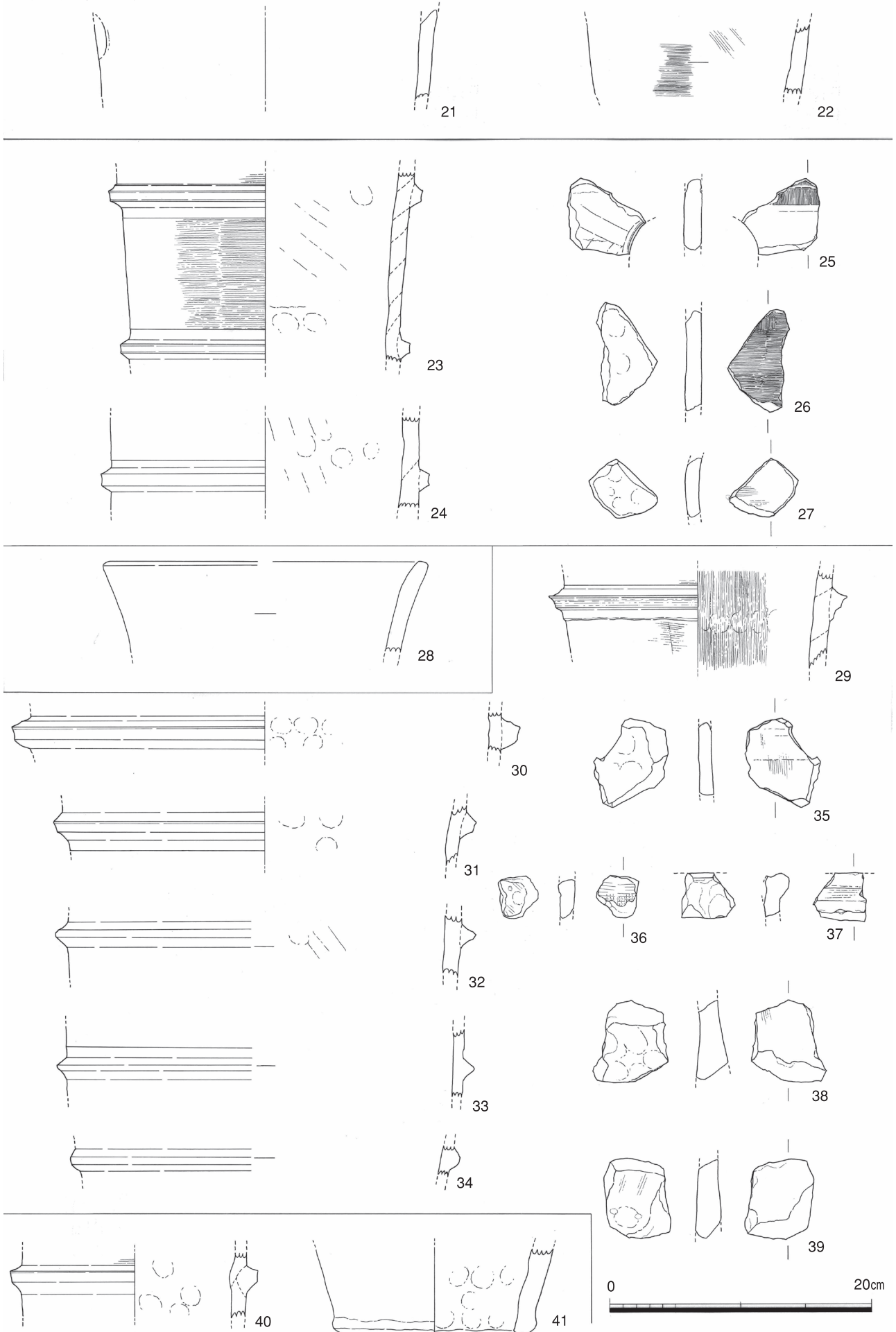


图10 5号墳採取埴輪実測図 (S : 1/4)



図11 5号墳採取埴輪外面写真(1)



図12 5号墳採取埴輪内面写真(1)

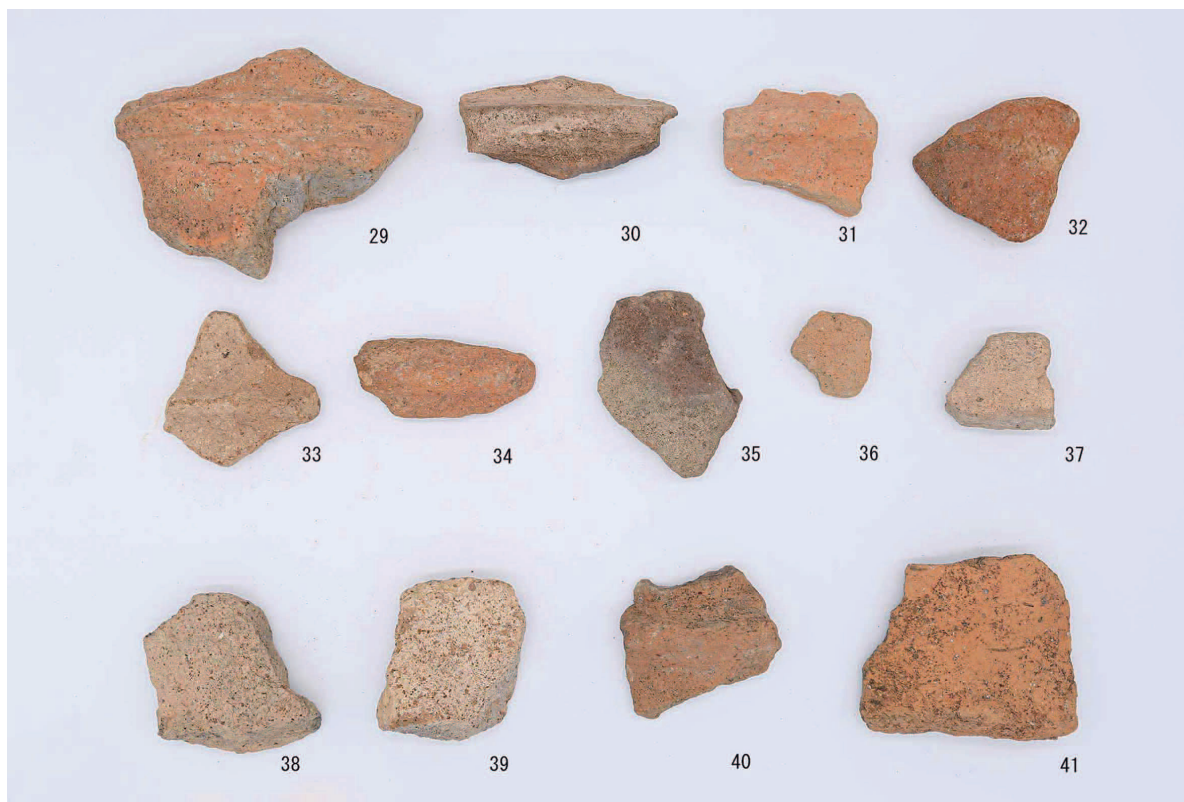


图13 5号墳採取埴輪外面写真 (2)



图14 5号墳採取埴輪内面写真 (2)

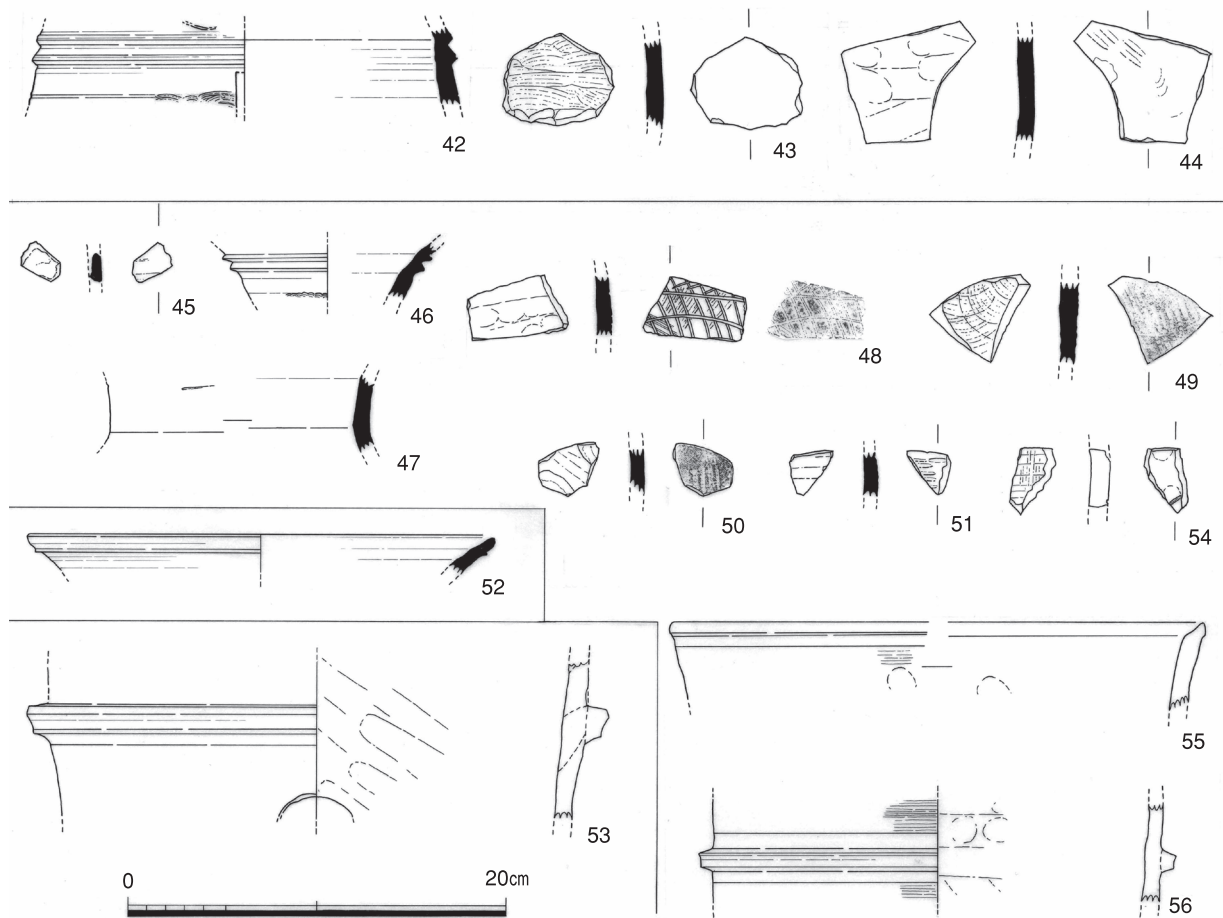


図15 7号墳採取須恵器・埴輪実測図 (S : 1/4)

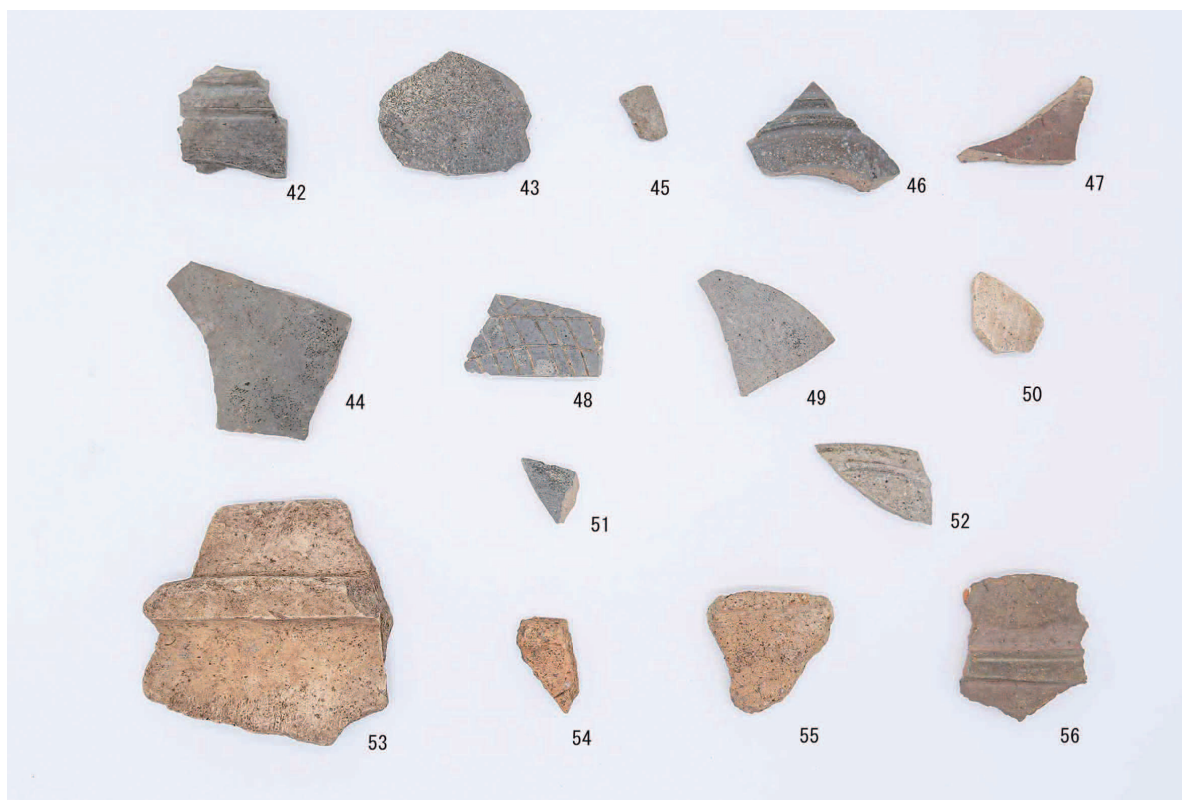


図16 7号墳採取須恵器・埴輪外面写真



图17 7号墳採取須恵器・埴輪内面写真

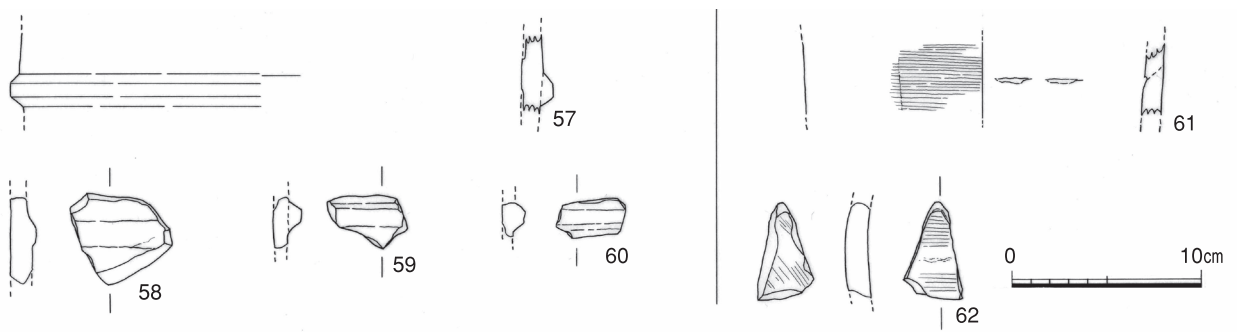


图18 採取地点不明埴輪実測図 (S : 1/4)



図19 採取地点不明埴輪写真



図20 採取埴輪小片写真

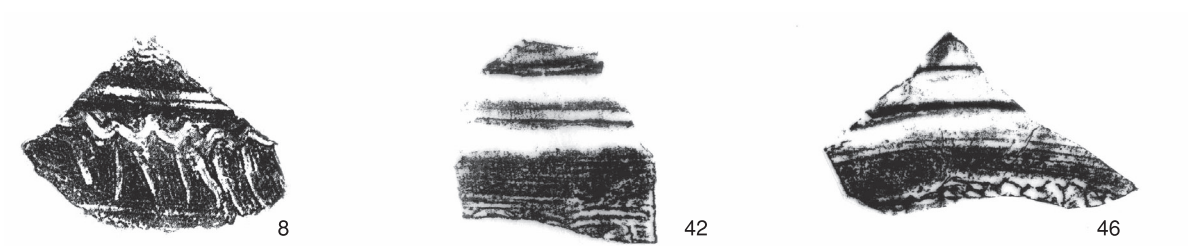


図21 須恵器クシ描き文拓影 (S : 2/3)

表1 4号・5号墳採取土師器・須恵器観察表

報告No	実測No	表採位置	内 容	外 面	内 面	燃 成	胎 土	色 調	備 考
1	5号墳 6	5号墳(列石付近) 図番号7	須恵器・壺(口縁部) 残存率1/14	回転ナデ	回転ナデ	良好・堅緻	微小の白色砂粒・黒っぽいガラス質鉱物を少量含む	(外)N6/0~N4/0 灰 (内)25Y6/1~25Y5/1 黄灰 (断)7.5YR5/4 にぶい・褐	
2	5号墳 17	5号墳(列石付近) 図番号7	須恵器・壺(体部) 小片	自然釉・灰付着につき不明	当て具痕をナデ消す	良好・堅緻	微小の白色砂粒を少量含む	(外)2.5Y6/1~2.5Y6/2 黄灰~灰黄 (内)2.5Y5/1 黄灰 (断)10YR5/1~10YR5/2 褐灰~灰黄褐	
3	4号墳 18	4号墳? 表採時期不明	須恵器・壺(体部) 小片	ナデか	磨減顕著で調整不明	ややあまい	3mm以下の褐色・灰色のシャモットを含む	(外)5Y7/2 灰白 (内)2.5Y8/3~2.5Y8/4 浅黄	
4	4号墳 13	4号墳他 1970.3.17.表際	須恵器・壺(体部) 小片	タタキメ→ハケメヤカキメによる文様?	当て具圧痕をナデ消す	良好	2mm以下の灰色砂粒を含む	(外)5Y6/15Y5/1 灰 (内)5Y6/2 灰オリーブ (断)5Y7/1 灰白	
5	4号墳 16	4号墳? 表採時期不明	須恵器・壺(体部) 小片	自然釉付着につき不明	当て具圧痕・ナデ	良好	少量の白色・灰色砂粒を含む	(外・内)5Y6/2 灰オリーブ (断)5Y7/2~5Y7/3 灰白~浅黄	7と接合
6	4号墳 15	4号墳? 表採時期不明	須恵器・壺(体部) 小片	自然釉付着につき不明	指ナデ	良好	少量の微小灰色砂粒を含む緻密な胎土	(外・内)7.5Y6/1 灰	
7	4号墳 17	4号墳? 表採時期不明	須恵器・壺(体部) 小片	自然釉付着につき不明	当て具圧痕・ナデ	良好	少量の白色・灰色砂粒を含む	(外)10Y7/1~10Y5/1 灰白~灰 (内)7.5Y6/1 灰 (断)5Y8/2~5Y8/3 灰白~浅黄	5と接合
8	4号墳 32	4号墳より下の道	須恵器・壺(肩部) 残存率1/14	ナデ沈線・クシ描き波状文	ヨコナデまたは回転ナデ	ややあまい	3mm以下の白色砂粒を含む	(外)10YR5/1 褐灰 (内)2.5Y6/1 黄灰 (断)10YR6/3 にぶい・黄橙	二次焼成で、一部煤化
9	4号墳 33	4号墳より下の道	須恵器・甕(体部) 小片	格子タタキメ	同心円圧痕	良好	微小の白色・灰色砂粒を多く含む	(外)5Y5/1 灰 (内)N7/0 灰白 (断)5Y7/2 灰白	4号墳に伴わない可能性大
10	4号墳 34	4号墳より下の道	埴輪または土師器・壺 小片	磨減顕著で調整不明	指オサエか	土師質 良好	2mm以下の白色・褐色・灰色砂粒を多く含む	(外・内)7.5YR6/4~5/4 にぶい・橙~にぶい・褐	4号墳に伴わない可能性大
11	4号墳 8	4号墳(南西下) 図番号9	土師器小片	磨減顕著で調整不明	ヨコハケ	土師質 良好	微小の白色・褐色・灰色砂粒を多く含む	(外・内)5YR6/6 橙	
12	5号墳 20	2019.10.27.取上 5号墳山道と里道 交差付近 図番号1	土師器・甕か 小片	ヨコハケか	磨減顕著で調整不明	良好	1mm以下の白色・褐色砂粒を含む	(外)5YR6/4~5YR6/6 にぶい・橙~橙 (内)7.5YR5/4 にぶい・褐	

表2 4号墳採取埴輪観察表

報告No	実測No	表採位置	内 容	外 面	内 面	燃 成	胎 土	色 調	備 考
13	4号墳 5	4号墳(南西下) 図番号9	円筒埴輪 口縁部小片	8~9本/cmの原体を用いたヨコハケ	8~9本/cmの原体を用いたヨコハケ	半須恵質 良好	2mm以下の白色砂粒を多く含む	(外・内)5YR6/6 橙 (断)2.5Y6/1 黄灰	相生市那波野丸山3号窯の資料に似ると指摘あり
14	4号墳 40	4号墳(南西下) 図番号9	形象埴輪または円筒埴輪 小片	突帯接合時のヨコナデあり ヨコハケか	指オサエ→タテハケ	土師質 良好・堅緻	微小の白色・灰色砂粒を含む	(外)7.5YR7/4 にぶい・橙 (内)7.5YR7/6 橙 (断)10YR6/4 にぶい・黄褐 (剥離痕)5YR6/6 橙	突帯剥離痕あり
15	4号墳 37	4号墳(南西下) 図番号9	円筒埴輪 残存率1/12	7本/cmの原体を用いたタテハケ→7本/cmの原体を用いたヨコハケ	7本/cmの原体を用いたタテハケ	土師質 良好	2mm以下の白色・褐色砂粒を含む	(外・内)10YR7/4~10YR6/4 にぶい・黄橙 (断)10YR5/1~10YR5/3 褐灰~にぶい・黄褐	突帯残存 内面外面ともに、幅の狭い同一原体を使用したと考えられる
16	4号墳 7	4号墳(南西下) 図番号9	円筒埴輪 残存率1/16	磨減顕著で調整不明	磨減顕著で調整不明	土師質 良好	3mm以下の褐色・暗褐色砂粒を多く含む	(外)10YR7/3~10YR6/2 にぶい・黄橙~灰黄褐色 (内)10YR7/4~10YR6/3 にぶい・黄橙	突帯残存 透し孔あり

17	4号墳 6	4号墳(南西下) 図番号9	朝顔形埴輪口縁部 残存率1/16	磨減顯著で 調整不明	磨減顯著で 調整不明	土師質 良好・堅緻	2mm以下の白色・褐色砂 粒を含む	(外)10YR6/3~10YR4/1 に ぶい黄橙~灰 (内)7.5YR6/6 橙	突帯残存 片島2号墳の資 料に似ており、三 味山よりは古い だろうと指摘あり
18	4号墳 14	4号墳より西下 図番号5	円筒埴輪 残存率1/10	ヨコハケ残 存	指オサエか	土師質 良好	3mm以下の白色・灰色砂 粒を含む	(外)5YR6/6 橙 (内)7.5YR6/6 橙	外面に赤色顔料 (10R4/6 赤) 残存
19	4号墳 1	4号墳 北側の外 図番号2	円筒埴輪 残存率1/10	磨減顯著だ が、微かに タテハケ残 存	磨減顯著で 調整不明	土師質 良好	白色砂粒を少量含む	(外)10YR6/4 にぶい黄橙 (内)2.5Y6/3 にぶい黄	突帯残存
20	4号墳 2	4号墳 北側の外 図番号2	朝顔形埴輪口縁部 小片	磨減顯著で 調整不明	磨減顯著で 調整不明	土師質 良好	2mm以下の褐色砂粒を 多く含む	(外)10YR7/3 にぶい黄橙 (内)10YR7/4~10YR5/4 に ぶい黄橙	

表3 5号墳採取埴輪観察表

報告No	実測No	表採位置	内 容	外 面	内 面	燃 成	胎 土	色 調	備 考
21	5号墳 18	2019.10.27取上 5号墳(山道と里 道交差付近) 図番号1	円筒埴輪 残存率 1/12	磨減顯著で 調整不明	磨減顯著で 調整不明	土師質 良好	2mm以下の白色・灰色砂 粒を多く含む	(外・内)5YR5/6 明赤褐	透し孔あり
22	5号墳 19	2019.11.2取上 5号墳(山道と里 道交差付近) 図番号1	円筒埴輪 小片	10~11本/ cmの原体 を用いたヨ コハケ	タテハケ	半須恵質 良好	1mm以下の白色・灰色砂 粒を含む	(外)10YR6/4 にぶい黄橙 (内)7.5YR6/6 橙 (断)2.5Y2/2 灰黄	
23	4号墳 35	5号墳(北東部の 崖付近) 図番号8	円筒埴輪 残存率1/7	ヨコハケ	ナナメ方向 の指ナデと 指オサエ	半須恵質 良好	2mm以下の白色・灰色砂 粒を含む	(外)7.5YR7/6 橙 (内)10YR6/4 にぶい黄橙 (断)2.5Y6/2 灰黄	突帯2条残存
24	5号墳 1	5号墳(北東部の 崖付近) 図番号8	円筒埴輪 残存率1/8	ブラシ目は 見られる が、調整は 観察できず	指ナデ・指 オサエ	半須恵質 良好	2mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外)7.5YR7/6 橙 (内)7.5YR6/6 橙 (断)2.5Y7/2~2.5Y7/3 灰 黄~浅黄	突帯残存
25	5号墳 3	5号墳(北東部の 崖付近) 図番号8	円筒埴輪 小片	磨減顯著だ が、突帯剥 離部分に20 ~ 22本/ cmの原体 を用いたタ テハケ残存	指ナデ	土師質 良好	微小の白色・褐色砂粒を 含む	(外・内)7.5YR6/6 橙 (断)2.5Y7/3 浅黄 (剥離痕)2.5Y6/1~2.5Y6/2 黄灰~灰黄	突帯剥離痕あり 透し孔あり
26	5号墳 4	5号墳(北東部の 崖付近) 図番号8	円筒埴輪 小片	16本/cm の原体を用 いたタテハ ケ→16本/ cmの原体 を用いたヨ コハケ	指ナデ・指 オサエ	半須恵質 良好	3mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外)7.5YR7/6~7.5YR6/6 橙 (内)7.5YR7/6~7.5YR7/8 橙~黄橙 (断)2.5Y7/2~2.5Y7/4 灰 黄~浅黄	
27	5号墳 5	5号墳(北東部の 崖付近) 図番号8	円筒埴輪か 小片	ヨコハケ	指ナデ・指 オサエ	半須恵質 良好	3mm以下の白色・灰色砂 粒を含む	(外・内)5YR6/8 橙 (断)2.5Y6/2~2.5Y6/4 灰 黄~にぶい黄	
28	5号墳 2	5号墳(南東部列 石付近) 図番号4	円筒埴輪・口縁部 小片	磨減顯著で 調整不明	磨減顯著で 調整不明	土師質 良好	3mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外)10YR5/3~10YR5/4 に ぶい黄褐 (内)10YR6/4 にぶい黄橙	
29	4号墳 36	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 残存率1/7	静止痕のあ るヨコハケ	10本/cm の原体を用 いたタテハ ケ	半須恵質 良好	2mm以下の白色・褐色砂 粒を含む	(外)5YR6/6 橙 (内)5YR6/6~5YR5/6 橙 ~明赤褐 (断)2.5Y7/4~2.5Y6/1 浅 黄~黄灰	突帯残存
30	5号墳 14	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 残存率1/16	ヨコナデ	指オサエ	土師質 良好	微小の白色砂粒を含む	(外)10YR7/4~10YR6/4 に ぶい黄橙 (内)7.5YR5/4 にぶい褐 (断)2.5Y7/2 灰黄	突帯残存
31	5号墳 7	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 残存率1/16	磨減顯著で 調整不明	指ナデまた は指オサエ	半須恵質 良好	1mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外)5YR7/8 橙 (内)7.5YR7/8 黄橙 (断)10YR7/4~10YR6/3 に ぶい黄橙	突帯残存

第5章 表面採取遺物

32	5号墳 16	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 小片	磨減顯著で 調整不明	指ナデまたは 指オサエ	土師質 良好	1mm以下の白色を多く 含む。3mm以下の褐色 砂粒を少し含む	(外)5YR5/6 明赤褐 (内)5YR5/4 にぶい赤褐	突帯残存
33	5号墳 15	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 小片	磨減顯著で 調整不明	磨減顯著で 調整不明	土師質 良好	1mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を多く含む	(外・内)10YR7/3~7/4 にぶ い黄橙	突帯残存
34	5号墳 13	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 小片	磨減顯著で 調整不明	磨減顯著で 調整不明	土師質 良好	微小の白色・褐色砂粒を 含む	(外)7.5YR6/6 橙 (内)7.5YR5/6 明褐 (断)10YR6/2 灰黄褐	突帯残存
35	5号墳 8	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 小片	磨減顯著だ が、突帯剥 離部分付近 にタテハケ 残存	指オサエ	土師質 良好	1mm以下の白色砂粒を 含む	(外)2.5Y6/3 にぶい黄 (内)10YR6/3~10YR6/4 に ぶい黄橙 (剥離痕)10YR4/2~10YR4/3 灰黄褐~にぶい黄褐	突帯剥離痕あり
36	5号墳 9	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	円筒埴輪 小片	5~6本/cm の原体を用 いたタテハ ケ→5~6本 /cmの原 体を用いた ヨコハケ	指オサエ・ 5~6本/cm の原体を用 いたナナメ ハケ	土師質 良好	微小の白色砂粒を含む	(外)10YR6/3 にぶい黄橙 (内)10YR6/4 にぶい黄橙 (断)2.5Y7/3 浅黄	内面外面ともに 同一原体を使用 と考えられる
37	5号墳 12	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	形象埴輪か 小片	ヨコナデ	剥離により 調整不明	半須恵質 良好	微小の白色砂粒を含む	(外・内)10YR7/4 にぶい黄 橙 (断)2.5Y7/1 灰白	
38	5号墳 10	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	形象埴輪か 小片	かすかにタ テハケか	指ナデ・指 オサエ	土師質 良好・堅緻	1mm以下の白色・褐色砂 粒を含む	(外)10YR6/4 にぶい黄橙 (内)10YR7/4 にぶい黄橙	
39	5号墳 11	5号墳(南側列石 付近) 図番号7	形象埴輪か 小片	磨減顯著で 調整不明	指オサエ・ タテハケか	土師質 良好・堅緻	3mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を多く含む	(外)10YR8/3 浅黄橙 (内)10YR7/4 にぶい黄橙 (断)2.5Y6/1 黄灰	突帯残存
40	4号墳 38	5号墳より西下の 里道 図番号6	円筒埴輪 残存率1/12	ヨコハケ	指オサエ	土師質 良好	2mm以下の白色・褐色砂 粒を含む	(外)7.5YR6/6 橙 (内)7.5YR7/6 橙 (断)10YR6/4 にぶい黄橙	
41	4号墳 39	5号墳より西下の 里道 図番号6	小型円筒埴輪また は形象埴輪の基部 残存率1/7	ブラシ目顕 著で調整観 察できず	指オサエ	半須恵質 良好	4mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外)7.5YR6/6 橙 (内)7.5YR6/6 橙 (断)2.5Y6/1~2.5Y5/2 黄 灰~暗灰黄	

表4 7号墳採取須恵器・埴輪観察表

報告No.	実測No.	表採位置	内 容	外 面	内 面	燃 成	胎 土	色 調	備 考
42	7号墳 10	7号墳(墳頂) 図番号4	須恵器・器台(脚部) 残存率1/16	回転ナデ→ クシ描き組 紐文	回転ナデ	良好・堅緻	微小の白色砂粒を少量含 む	(外)2.5Y6/1~2.5Y5/1 黄 灰 (内)5Y6/1 灰 (断)2.5Y6/3~2.5Y6/1 にぶ い黄~黄灰	透し孔あり TK216かと指摘 あり 外面に煤化
43	7号墳 11	7号墳(墳頂) 図番号4	須恵器・甕(体部) 小片	降灰が融け て調整不明	無文当て具 痕か	良好・堅緻	微小の白色砂粒を少量含 む	(外)7.5Y6/1~7.5Y5/1 灰 (内)N5/0 灰 (断)10YR6/2 灰黄褐	
44	7号墳 12	7号墳(墳頂) 図番号4	須恵器・甕(体部) 小片	平行タタキ メ→ナデ	無文当て具 痕→指ナデ	良好・堅緻	微小の白色・灰色砂粒を 少量含む	(外)5Y5/1 灰 (内・断)2.5Y6/1~2.5Y6/2 黄灰~灰黄	
45	7号墳 5	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	須恵器・壺または甕 小片	ケズリか	内面剥離で 調整不明	良好	微小の褐色・灰色砂粒を 含む	(外)7.5Y6/1 灰 (内)10YR6/3 にぶい黄橙	
46	7号墳 15	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	須恵器・壺またはハ ソウ(口縁部) 残存率1/5	回転ナデ→ クシ描き波 状文	回転ナデ	良好・堅緻	2mm以下の白色砂粒を 含む緻密な胎土	(外)7.5YR3/3 暗褐 (内)2.5Y5/3 黄褐 (断)10YR5/3 にぶい黄褐	内面は自然釉付 着で光沢あり
47	7号墳 6	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	須恵器・壺または甕 (頸部) 小片	ヨコナデま たは回転ナ デ	ヨコナデま たは回転ナ デ	良好・堅緻	3mm以下の白色・褐色砂 粒を含む	(外)7.5YR4/3 褐 (内)10YR6/1~10YR5/2 褐灰~灰黄褐 (断)10YR6/3 にぶい黄橙	混和剤や焼成状 況・色調が他の 須恵器と異なる
48	7号墳 9	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	須恵器・壺(体部) 小片	平行タタキ メ→カキメ →ヘラ描き の線刻	無文当て具 痕→ナデ	良好・堅緻	微小の白色・灰色砂粒を 含む	(外)N4/0~N5/0 灰 (内)10Y5/1 灰 (断)2.5Y5/3 黄褐	TK216かと指摘 あり

49	7号墳 8	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	須恵器・甕(体部) 小片	平行タタキ メ	無文当て具 痕か	良好・堅緻	1mm以下の白色・灰色砂 粒を含む	(外)5Y5/1 灰 (内)2.5Y6/1 黄灰 (断)5Y5/1~2.5Y7/2 灰 灰黄	やや年代下るか もと指摘あり
50	7号墳 4	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	須恵器・甕(体部) 小片	平行タタキ メ	指ナデ	ややあまい	微小の灰色砂粒を含む	(外)2.5Y8/1~2.5Y8/2 灰白 (内)2.5Y8/2 灰白	やや年代下るか もと指摘あり
51	7号墳 7	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	須恵器・甕(体部) 小片	平行タタキ メ	ヨコナデ	良好	微小の白色・灰色砂粒を 含む	(外)7.5Y5/1~N4/0 灰 (内)5Y6/1~5Y5/1 灰 (断)2.5Y7/2 灰黄	
52	7号墳 13	古墳より西下 図番号1	須恵器・甕または壺 (口縁部) 残存率1/16	回転ナデ	回転ナデ	良好	1mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外)5Y6/1 灰 (内)5Y4/3 暗オリーブ (断)5Y6/1~5Y6/2 灰~灰 オリーブ ¹⁾	一部、自然釉付 着。TK216でも 良いが、やや新 しいかもしれない と指摘あり
53	7号墳 1	7号墳より南西下 の道 図番号2	円筒埴輪 残存率1/12	磨減顕著で 調整不明だ が、かすか に横方向の 調整が残る	ナナメ方向 の指ナデ	土師質 良好・堅緻	2mm以下の灰色砂粒を 含む	(外)10YR6/4 にぶい黄橙 (内)10YR8/2 灰白 (断)2.5Y7/1~2.5Y6/1 灰白 ~黄灰	突帯残存透し孔 あり川西Ⅳ期・ TK73頃の指摘 あり
54	7号墳 3	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	円筒埴輪または形 象埴輪 小片	指オサエ	タテハケ→ ヨコハケ	半須恵質 良好	2mm以下の白色・灰色砂 粒を含む	(外)7.5YR7/6 橙 (内)5YR6/6 橙 (断)10YR6/4 にぶい黄橙	外面に線刻あり
55	7号墳 2	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	円筒埴輪口縁部 小片	ヨコハケ	指オサエか	土師質 良好	2mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を多く含む	(外)10YR6/4 にぶい黄橙 (内)10YR7/4~10YR6/4 に ぶい黄橙	
56	7号墳 1	7号墳(南側列石 付近) 図番号3	円筒埴輪 残存率1/16	ヨコハケ	指オサエ・ 指ナデ	半須恵質 良好	3mm以下の白色砂粒を 多く含む	(外)10YR5/2~2.5Y5/2 灰 黄褐~暗灰黄 (内)5YR6/4~5YR5/4 にぶ い橙~にぶい赤褐 (断)5Y6/1 灰	突帯良好

表5 採取地点不明埴輪観察表

報告No	実測No	表採位置	内 容	外 面	内 面	燃 成	胎 土	色 調	備 考
57	4号墳 9	4号墳他 1970.3.17.表採	円筒埴輪 小片	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 ややあまい	4mm以下の白色ブロッ ク、微小の褐色・灰色砂 粒を含む	(外・内)10YR7/4 にぶい黄 橙	突帯残存
58	4号墳 10	4号墳他 1970.3.17.表採	円筒埴輪 小片	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	ややあまい 土師質	3mm以下の白色ブロッ ク、4mm以下の褐色砂 粒またはシャモット、 4mm以下の灰色砂粒を 含む	(外・内)10YR8/4~10YR7/4 浅黄橙~にぶい黄橙	突帯残存
59	4号墳 11	4号墳他 1970.3.17.表採	円筒埴輪 小片	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 ややあまい	2mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外・内)7.5YR7/3~7/4 に ぶい橙 (断)2.5Y6/2 灰黄	突帯残存
60	4号墳 12	4号墳他 1970.3.17.表採	円筒埴輪 小片	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 ややあまい	微小の白色・褐色砂粒を 含む	(外・内)10YR7/4 にぶい黄 橙	突帯残存
61	4号墳 19	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪 残存率1/12	8本/cmの 原体を用い た静止痕の あるヨコハ ケ	磨減顕著で 調整不明	半須恵質 ややあまい	5mm以下の白色ブロッ ク、3mm以下の褐色・灰 色砂粒を含む	(外)7.5YR6/4 にぶい橙 (内)7.5YR7/4 にぶい橙 (断)10YR6/4 にぶい黄橙	内面に粘土紐接 合痕あり 二次焼成で、一 部煤化
62	4号墳 20	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし朝 顔形埴輪 小片	7本/cmの 原体を用い たヨコハケ	ナナメハケ	半須恵質 ややあまい	4mm以下の白色ブロッ ク、1mm以下の褐色・灰 色砂粒を含む	(外)10YR7/4~7.5YR6/4 にぶい黄橙~にぶい橙 (内)7.5YR7/4~10YR7/4 にぶい黄橙 (断)7.5YR7/4~7.5YR7/6 にぶい黄橙	二次焼成で、一 部煤化

表6 採取埴輪小片観察表

報告No	実測No	表採位置	内 容	外 面	内 面	燃 成	胎 土	色 調	備 考
63	4号墳 3	4号墳 北側の外 図番号2	埴輪小片	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好・堅緻	白色砂粒を多く含む	(外・内)7.5YR5/4 にぶい褐	
64	4号墳 4	4号墳 北側の外 図番号2	土師器または埴輪 小片	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	微小の白色・褐色砂粒を 含む	(外・内)10YR6/4 にぶい黄 橙	

65	4号墳 21	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	4mm以下の褐色砂粒ま たはシャモット、微小の 灰色砂粒を含む	(外・内)10YR8/3 浅黄橙 (断)2.5Y8/3 浅黄	
66	4号墳 22	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし土 師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	微小褐色砂粒を含む	(外・内)10YR7/4 にぶい黄 橙 (断)10YR8/2 灰白	
67	4号墳 23	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	2mm以下の褐色砂粒を 含む	(外・内)10YR7/3~10YR7/4 にぶい黄橙 (断)10YR8/4 浅黄橙	
68	4号墳 24	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	3mm以下の白色ブロッ ク、2mm以下の白色・褐色・ 灰色砂粒を含む	(外)10Y7/4~7.5YR7/6 に ぶい黄橙~橙 (内)7.5YR7/6 橙 (断)10YR7/4 にぶい黄橙	
69	4号墳 25	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	2mm以下の白色ブロッ ク、1mm以下の灰色砂 粒を含む	(外・内)10YR7/4 にぶい黄 橙	
70	4号墳 26	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	1mm以下の褐色砂粒を 含む	(外・内)10YR8/4 浅黄橙	
71	4号墳 27	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	微小の白色・褐色・灰色砂 粒を含む	(外)10YR7/4 にぶい黄橙 (内)10YR7/3 にぶい黄橙	
72	4号墳 28	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	微小の白色・褐色砂粒を 含む	(外・内)7.5YR7/4 にぶい橙 (断)10YR7/4 にぶい黄橙	
73	4号墳 29	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	2mm以下の白色・灰色砂 粒を含む	(外)10YR8/4 浅黄橙 (内)2.5Y8/3 浅黄	二次焼成で、一 部煤化か
74	4号墳 30	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	微小の褐色・灰色砂粒を 含む	(外)10YR7/3 にぶい黄橙 (内)10YR8/4 浅黄橙	
75	4号墳 31	4号墳? 表採時期不明	円筒埴輪ないし 土師器	磨減顕著で 調整不明	磨減顕著で 調整不明	土師質 良好	2mm以下の白色ブロッ ク、微小の褐色・灰色砂 粒を含む	(外)10YR7/4 にぶい黄橙 (内)10YR8/4 浅黄橙	

第4節 鉄器

朝臣4号墳や7号墳の墳丘上より、3種11点の鉄片を表面採取したが、いずれも古墳に伴うものかどうかの決め手がない。

図22・23・24の写真2の採取場所は、7号墳の墳頂（第5章図3の④）である。赤錆が顕著であることと直径5mmほどの円板の中央に小孔が穿たれていることから、近現代の何らかの部品が風化したのではとも考える。

写真1・3については、第3章図1によると、前山1号墳（朝臣4号墳）と前山3号墳（朝臣7号墳）で採取したと記録があるが、50年を経過した現在では厳密な位置を特定できない。黒錆の状況から古墳に伴う可能性が高いと考えられる。しかしながら図22の1右端の一番大きい鉄片さえも法量は横51mm×縦36mm×厚さ11mmと小片のため、製品を決定できる要素がなく不明である。尚、厚さ11mmのものは板状の鍛造品と考えられる。その幅から鉄鏃・釘・カスガイ・ヤリガンナでないので、刀剣類や武具類の可能性を残す。このような鉄製品は、主体部内（竪穴式石室・箱式石棺・木棺直葬）か、主体部横や上の副葬品箱からの出土例が多いが、朝臣4号墳・7号墳には明確な盗掘痕がないので、主体部などから流出したとは考え難い。墳丘上の埴輪列に置かれていた鉄器が採取された例はあるようなので、主体部上部に盛土をし、その上で行われた祭祀に伴うのではないかと推測している。但し、そのような供献祭祀について具体的な事例を知らないで、あくまでも推測の域を出ない。また、墳丘造営時に盛土上部への埋納があったかもしれない。

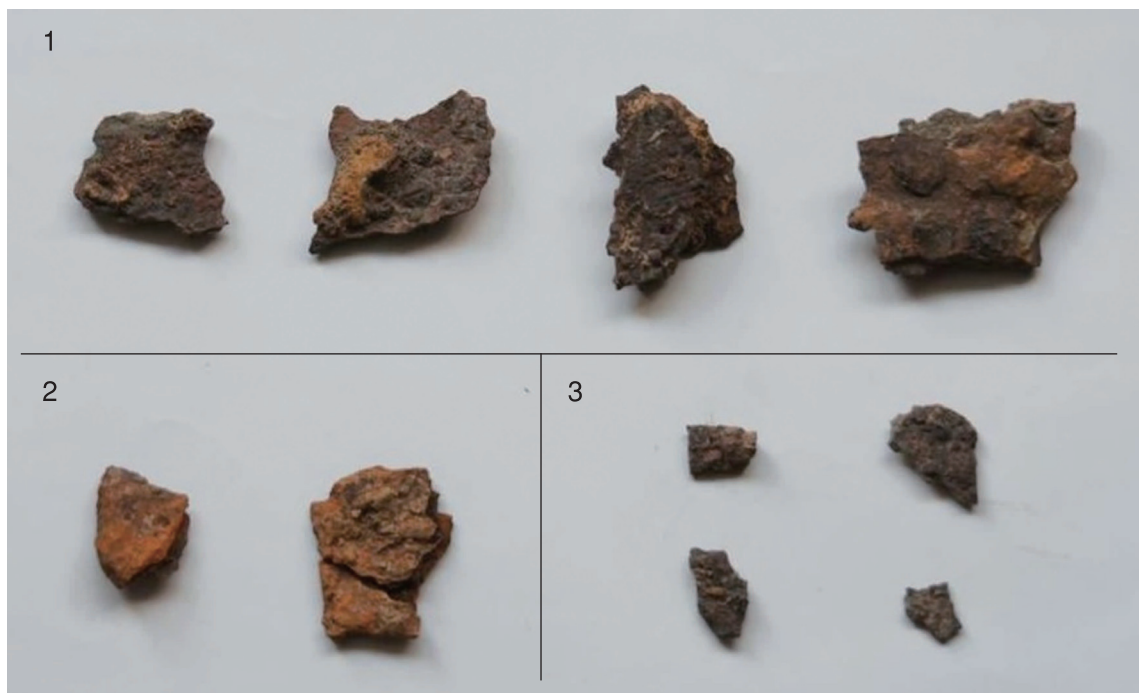


図22 鉄器現状写真

NHKの「アイアンロード～知られざる古代文明の道～」では、鉄は、紀元前12世紀から10世紀頃に西アジアの匈奴（きょうど）が産み出し、東アジアの漢へ伝播して行き朝鮮半島へと伝わったと紹介されていた（注1）。青銅器と合わせ鉄の発見は、人類において画期的な革命であっただろう。斧・ヤリガンナ・刀子などの工具や鋤・鍬などの農具といった道具に加えて、鉄鏃・刀剣などの武器、甲冑や馬具などが鉄を加工して作られた。ところが、日本では鉄を生産することができなかったので、弥生時代中期以降、朝鮮半島南部に鉄を求めて倭国から多くの人々が海を渡り、倭国の特産物（米・絹・貝殻など）を携えての交易や共同作業を行った可能性がある。たとえば、東葉菜城（トンネネソン）遺跡では鉄器を作る鍛冶工房から出土した土器の多くは弥生土器やそれをまねて作られた弥生系土器である。また、多島海に浮かぶ小島にある勒島（ヌクト）遺跡では鉄器が製作されていたことが確認されているが、ここでも大量の弥生系土器が出土しているのである（注2）。

時代が下って、朝臣4号墳・5号墳・7号墳が築造された古墳時代中期には、多くの古墳に、多種多様な農具・工具、刀剣類や鉄鏃といった武器や甲冑・馬甲などの武具に加えて鉄素材そのものである鉄鏃が副葬・埋納されている事実は、現在のような明確な国境のない時代に頻繁な人々の往来やネットワークが存在していたことを意味している。朝臣4号墳ないし7号墳で採取した鉄器も、あるいはこのような人々の交流を伝える資料かもしれない。

（注1）NHKスペシャルとして2020年1月13日に初回放送され、評判のたかさから再放送され、さらに詳しい番組が作成された。

（注2）高田貫太 2017『海の向こうから見た倭国』〈講談社現代新書2414〉講談社

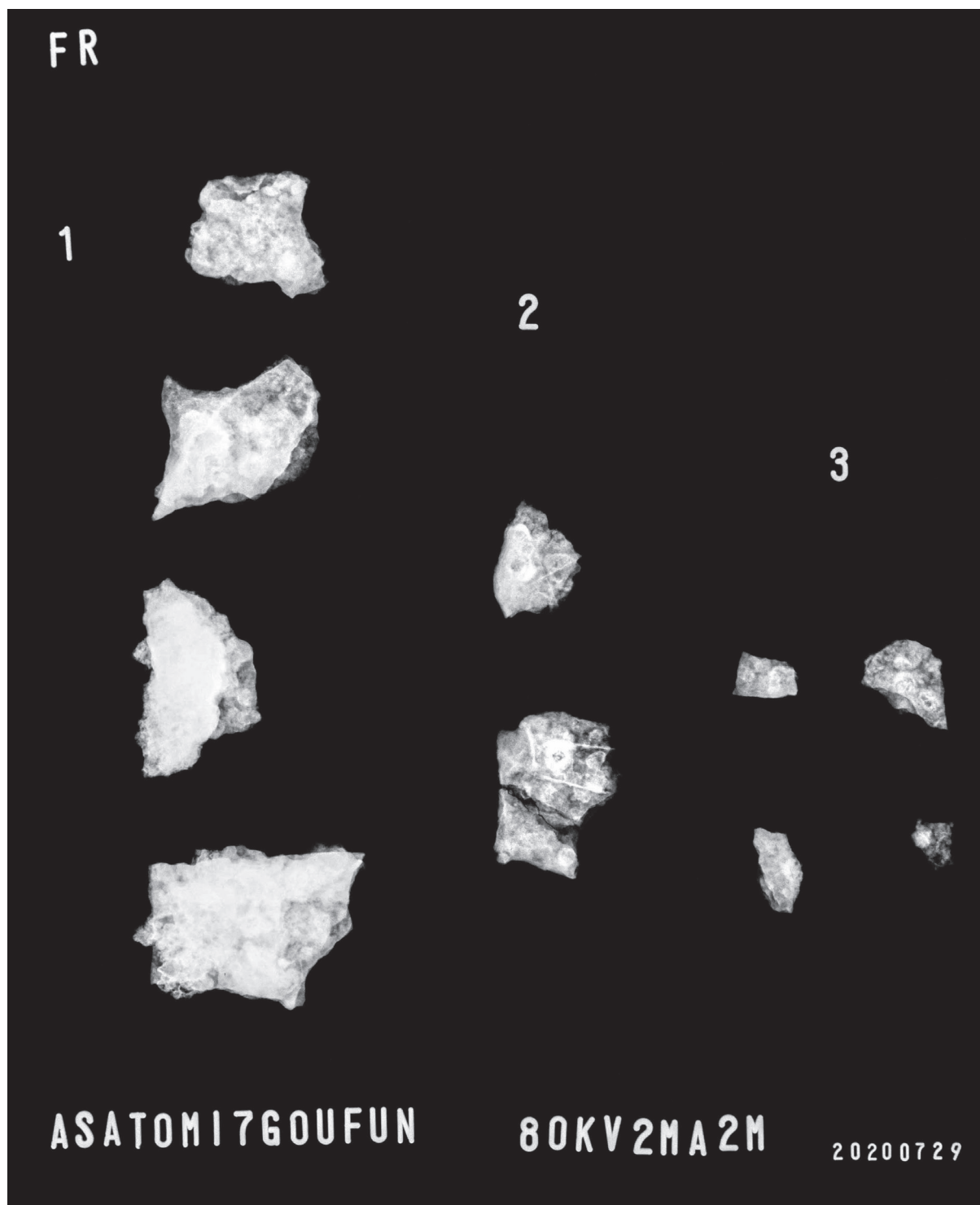


図23 鉄器レントゲン写真（平面）

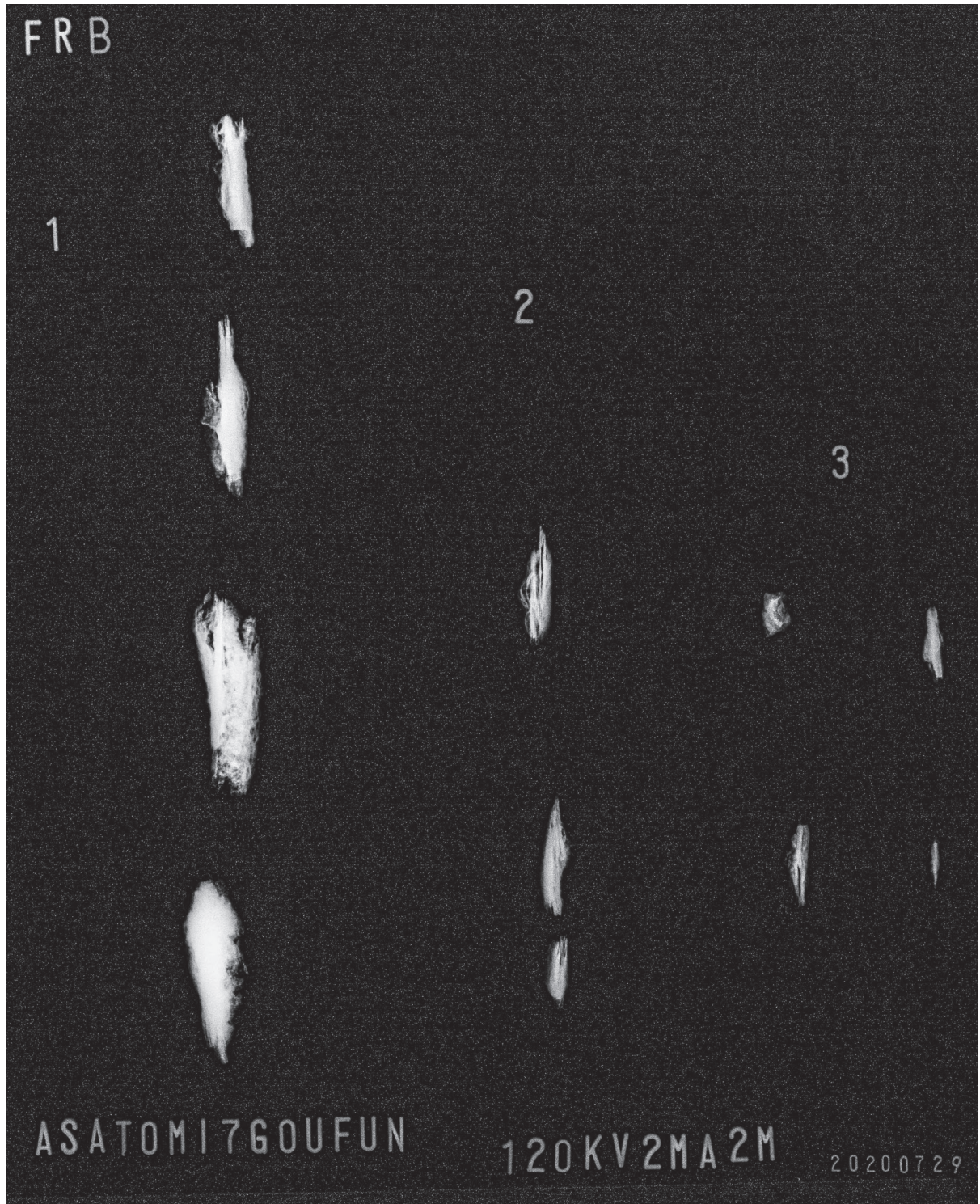


図24 鉄器レントゲン写真（側面）

第6章 考察と紹介

第1節 須恵器・埴輪からみた朝臣4号・5号・7号墳

第5章第2・3節で述べたように、朝臣4号・5号・7号墳で採取された須恵器・埴輪には幾つかの共通点と相違点がある。ここでは、改めて要点を整理した上で、4号墳と5号墳の関わりや4号・5号・7号墳の築造順位、年代観についてまとめる。さらに、古墳時代中期において、朝臣山古墳群はどのような意義があり、播磨の首長系譜上どう位置付けられるのかを類推する。

ただし、残存率や器面の状態がさほど良いとはいえず、二次移動の可能性もある限られた資料に拠っているので、個々の古墳の築造時期について明確な結論を出すのは難しい。今後、発掘調査等によって資料が増えれば、年代観に多少の変動があるかもしれないという前提で、論を進めたい。

1) 須恵器

- ① 4号・5号墳に関わる9点（第5章図5の1～9）並びに7号墳に関わる11点（第5章図15の42～52）は小片だが、9を除くと、いずれも初期須恵器（注1）である。これらの器種構成や焼成状況に当地域の特徴を読み取ることができる。
- ② 7号墳の資料は墳頂や列石付近で採取されたものが多い。これらは壺（ハソウかもしれない破片を含む）が中心で、甕と器台もあるが、杯は認められない。この傾向は4号・5号墳も同様で、壺はみられるが杯はない。これらは副葬品というより、墳丘上における供献儀礼に用いられたものであろう。
- ③ 7号墳で採取された甕体部片は、内面に無文当て具痕とナデがみえ、外面は平行タタキメをナデ消しているものとナデ消していないものの両方がある。前者は他よりもやや古い特徴を有するが、後者はTK73型式ないしそれ以後のものと理解できる（注2）。
- ④ 総じてきめ細かく緻密な胎土を用いていて、壺の口縁部片である1は断面に黒っぽいガラス質の鉱物がみえるので、花崗岩バイラン土（風化土）に起源をもつ胎土を用いていると考えられる。このような胎土の特徴は他の個体にも通じる。長石・石英を含む胎土のガラス質が融けてつるりとした独特の手触りのものや、サンドイッチ状に色調変化のある断面が磁器を思わせるほど硬質で滑らかなものがあるなど、焼成は頗る良好なものが多い。
- ⑤ 4号・5号墳に伴う4は、壺の体部片で格子状の文様がある。台付壺の肩部片である8は二種類のクシ描き波状文を併用して流水文のように仕上げている（注3）。又、7号墳に伴う器台の脚部片42に分割技法とみられる組紐文が施されている（注4）。壺体部片48にはヘラ描きによる斜格子文がみられ、鋸歯文も想定できる。これらの文様は、相生市宿禰塚古墳（注5・図4）や赤穂市蟻無山1号墳（注6・図3）の須恵器の文様に似たものである。
- ⑥ これらの初期須恵器は、胎土の様相、鉱物の融け具合や酸化・還元状態、色調、文様等が陶邑のものと異なるので、陶邑から供給されたものではなく、播磨の胎土を用いた在地窯のものと考えられる。

2) 埴輪

- ① 4号墳では墳丘斜面や墳丘裾、さらに墳丘よりも下った位置で8点（第5章図7の13～20）、5号墳では墳丘裾付近で21点（第5章図10の21～41）、7号墳では墳丘裾の列石付近やそれより下った位置で4点（第5章図15の53～56）の埴輪片が採取されている。
- ② 埴輪片には土師質焼成のものと同須恵質焼成のものがあるが、明確な黒斑を有する個体や断面が黒色を呈するものは確認できないので、すべて窖窯（あながま）焼成と考えられる。ただし、煤化や二次焼成のみられる個体があるので、山火事やたき火などによる被熱も想定できる。
- ③ 外面の調整は、1次調整のタテハケに加えて、2次調整のヨコハケを施したものがみられる。典型的なA種ヨコハケと異なるが、原体の幅が突帯間の幅よりはるかに狭い15や、かすかに静止痕のみられるB種に似た29もある。又、内面の調整はハケないしナデで、ケズりはみられない。したがって、5世紀前半の畿内の製作技法をかなり正確に受け入れていたことがわかる。
- ④ 円筒埴輪の突帯の断面形態は、4号墳において、少量ながらも幅が狭くて突出の高い方形のもの（15・16）がある。ただし、圧倒的に多いのは台形ないし突帯上面に強いナデを加えたM字形のものである。又、突帯貼り付け時に回転運動を利用したことで、ナデの条線が明確に残っているもの（23・29）もある。ここから、在地の須恵器職人が埴輪作りに参加していたと推測することもできよう。
- ⑤ 透し孔の全容が観察できるものはないが、16・21・25には円形透し孔がある。一方、方形や三角形のものは確認できない。
- ⑥ 円筒埴輪の口縁部片は少ないが、13と55は、端部にナデによる内傾面があり、わずかに外側に摘み出したような屈曲をもつ。又、28は緩やかに外に開く形態である。尚、端部に突帯を伴うものは認められない。
- ⑦ 色調は土師質焼成の場合、にぶい橙やにぶい黄橙色（視認色ではベージュ）のものが多いが、視認色が褐色や橙褐色のものなども散見される。一方、半須恵質焼成の場合ほとんどが橙色である。このため、全体的には茶～橙色系統である。ただし、18には赤彩があるので、「赤い埴輪」が用いられていたことがわかる。
- ⑧ 円筒埴輪の突帯数・段数は不明であるが、大きさについては、直径20cm前後のもの、30cmを超えるもの、さらにそれより大きく約40cmのものに分けることができる。このうち、30cmを超えるものや約40cmのものは4号墳に顕著である一方で、直径20cm前後のものは5号墳に偏る傾向があるので、墳丘規模との関わりが想定できる（注7）。
- ⑨ 17・20は朝顔形埴輪の口縁部片と考えられる。又、14や37～39は形象埴輪片の可能性もある。したがって、朝臣山古墳群には円筒埴輪以外の埴輪も立てられていたといえる。とくに大形円墳である4号墳には円筒埴輪と朝顔形埴輪からなる埴輪列が巡っていたとみて大過ない。

3) 古墳の年代観

4号・5号墳に直接伴うとみられる須恵器1～8や7号墳に伴う42～51は初期須恵器なので、須恵器からみた各古墳の築造時期は5世紀前半といえる。さらにその時期を一層絞り込むと、前者については、4の施文が宿禰塚古墳出土の台付壺の文様に通じること（注8）、8の波状文が蟻無山1号墳の器台等にみられる西播磨（揖保川流域・千種川流域）特有の波状文（注9）を退化させた文様と

理解できることから、TK216型式の可能性が考えられる（注10）。又、後者については、外面のタタキメをナデ消している44が幾分古い様相を呈しているが、平行タタキメを残す甕片がみられるので、必ずしもTG232型式まで遡らせる必要はないだろう（注11）。むしろ、42が蟻無山1号墳の器台や宿禰塚古墳の台付壺と共通点をもっていることや、クシ描き文を分割技法の組紐文とみることから、4号・5号墳と同様にTK216型式頃といえよう。したがって、5世紀第2四半世紀と考えることができる。

埴輪についてみると、4号墳の埴頂に近い位置で採取された15・16は調整・突帯形態・焼成に他の埴輪より古い要素がみられる。7号墳に伴う56の突帯形態は幾分これに近い。又、13・55はわずかに端部が外側に屈曲する口縁部形態であることから、荒木幸治・山中良平両氏によって相生市那波野丸山3号窯の資料との類似性を指摘されている（注12）。

周辺の古墳である程度埴輪の実態がわかっているものとして、たつの市（旧御津町）輿塚古墳（朝臣山古墳群から南南東に約2km）、赤穂市蟻無山1号墳（朝臣山古墳群から北西に約16.5km）、たつの市（旧揖保川町）片島1号墳（朝臣山古墳群から北北西に約6.5km）がある。

輿塚古墳（注13）の円筒埴輪は、細く突出する突帯をもち、透し孔は方形や三角形。黒斑がみられる野焼き焼成である。蟻無山1号墳（注14）の円筒埴輪は、透し孔はすべて円形で、1次調整のタテハケと2次調整のヨコハケが観察できるが、黒斑が散見されるので窖窯焼成ではないと考えられる。又、片島1号墳（注15）の円筒埴輪は、断面形が台形の突帯が多く、外面の2次調整については第1段までB種ヨコハケを施したものがみられる。しかも、すべての個体が窖窯焼成で、約4分の1は須恵質焼成である。

これらの古墳の埴輪と朝臣山古墳群の埴輪を比較すると、輿塚古墳と蟻無山1号墳は明らかに朝臣山古墳群より先行しており、片島1号墳は朝臣山古墳群より新しい傾向がある。ちなみに蟻無山1号墳の築造時期はTK73型式以前とされている。一方、片島1号墳は須恵器甕とハソウの様相からTK208型式に比定されている。これらの古墳の年代観を援用すると、朝臣山古墳群で採取された埴輪はTK216型式前後とみることができる。したがって、朝臣4号・5号・7号墳の埴輪は概ね川西Ⅳ期の埴輪群とみてよく、5世紀中頃のもの、ただし450年を下限とするといえる。又、窖窯焼成の埴輪については、畿内中枢部での出現は墓山古墳などON231型式（5世紀前葉）とされているが、この段階では野焼き焼成も併用されており、窖窯焼成に収斂するのはTK73型式を待たなくてはならない（注16）。畿内中枢部に先行して西播磨に窖窯焼成の埴輪が導入されたり、窖窯焼成に特化したりするとは考え難いので、朝臣4号・5号・7号墳の埴輪の年代を5世紀前葉まで遡らせることはできない。したがって、今回確認した埴輪の時期は、5世紀第2四半世紀とみることができる。

このように、須恵器・埴輪から、4号・5号・7号墳は5世紀第2四半世紀に築かれたことが推測できる。尚、古墳毎に埴輪片の様相を比較すると、4号墳の埴頂に近い位置で採取されたものに対して、4号墳の埴裾やそれより下で採取されたもの、5号墳に伴うものは、法量の違いに加えて、突帯形態や半須恵質焼成の多さなど、やや新しい傾向がある。したがって、4号墳と5号墳は、埴輪を見る限り同一の古墳とするには根拠が薄い。ここでは、4号墳と7号墳は近い時期に相次いで築かれ、やや遅れて5号墳が築かれたと理解しておきたい。

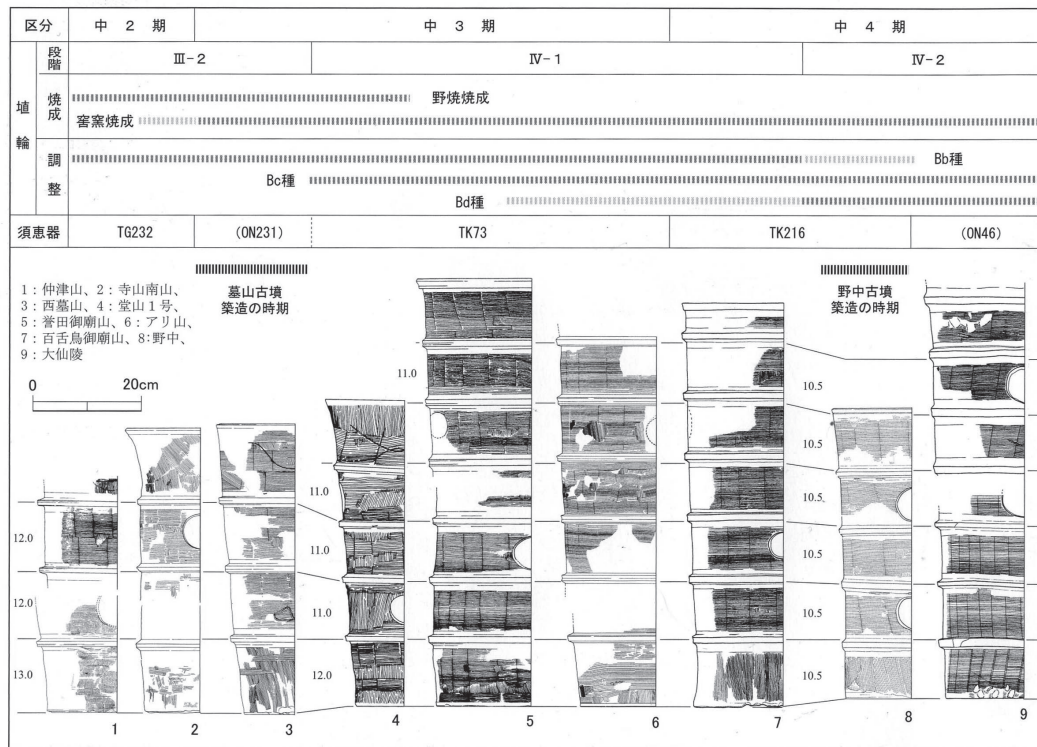


図1 鈴木一有 百舌鳥・古市古墳群を中心とした埴輪の変遷 (2014年)

4) 古墳の位置付け

実測調査の結果、朝臣4号墳は直径50m・高さ6mの円墳、5号墳は南北24m・東西28m・高さ2.5mの略方墳、7号墳は直径24m・高さ2.5mで列石を巡らす円墳であることが判明した。5世紀前半、さらに時期を絞り込むと5世紀第2四半世紀頃の古墳といえるので、これらに阿蘇溶結凝灰岩製の環状把手付舟形石棺を有する朝臣1号墳（注17）や、前方後方墳であることが確認されている朝臣3号墳（注18）を加えると、5世紀前半に朝臣山一帯の山上に、継続して中規模古墳が築かれていたことになる。つまり、弥生時代終末期から古墳時代前期に多くの墳墓・古墳を築き、播磨の盟主的な存在であったものの、4世紀末～5世紀前半の築造とされる山王山古墳（注19）をもって首長系譜が途絶えたとみられてきた揖保川流域、とくに御津地域について、これまでとは異なる解釈が可能になったのである。

実際には朝臣1号・3号墳の遺物について検討が必要だが、これらを朝臣4号墳等より先行するものとみると、山王山古墳→朝臣1号・3号墳→朝臣4号墳といった東から西へと移動する首長墓の系譜が辿れそうである。また、これに続く古墳として、綾部山1号墳（將軍塚古墳・直径約38mの円墳）や前方後方墳である綾部山14号・29号墳があり（注20）、6世紀初頭の小丸山古墳（墳長48mの前方後円墳）（注21）まで系譜がつながっていく。ただし、5世紀代についてみれば、これまで前方後円墳がみられなかった揖保川の西側、平野部や低丘陵が広がる場所に相生市宿禰塚古墳（帆立貝式・墳長約40m）と塚森古墳（帆立貝式・墳長約60m）（注22）が築かれているので、新興勢力の台頭も認められる。つまり、かつて揖保川流域の中でもとくに御津地域が際だった存在であったものから、同一水系内で複数の首長系譜が並立する状態へと変化したことがわかる（第1章図6参照）。このような首長系譜の分化と時を同じくして、播磨の盟主的な地位は揖保川流域から東に移動している。この背景には、地域首長とヤマト政権との連携の変化があり、ヤマト政権は、旧来から

関わりを持ち続けてき揖保川流域の首長から、市川流域や加古川流域の首長へと結びつく相手を変えていったことが想定できる。その結果、播磨全体における揖保川流域の地位の低下と西播磨における複数勢力の併存をみたのである。

ところで、弥生時代終末期以来、揖保川流域や大津茂川流域に多くの弥生墳墓・古墳が築かれてきた背景として、海上・河川による水上交通について留意する必要がある。

大津茂川流域の丁瓢塚古墳（注23）（墳長104mの前方後円墳）は平野部に位置しており、大津茂川を遡った川津を意識した立地といえるが、そのほかは山塊上に位置していて、眺望のきくものが多い。第2章で石黒始氏が詳述されているように、古墳が築かれた頃の揖保川河口域は、現在平野となっている範囲のかなりの部分が海域で、港として利用できる内海が広がっていた。したがって、それぞれの古墳の眼下は海域や揖保川の流路であり、これらの古墳が海・川を介した水上交通を意識したものであることは明らかである。これらは、海上を行く船からその位置を確認できるとともに、海上ルートを眼下に納めることを意識した「海の古墳」（注24）である。

古くには、白鷺山箱式石棺墓（注25）から舶載鏡や仿製鏡が出土しており、他地域との交流がうかがえる。弥生墳墓では、岩見北山積石塚4号墓（注26）の形状や讃岐で作られた大形壺の存在から、讃岐との関わりが推定できる。また、綾部山39号墓（注27）から出土した供献土器は破碎されていたが、角閃石や金雲母を多く含むことから下川津B類の土器であることがわかり、主体部の構造は阿波地域との親近性が認められるなど、阿波・讃岐との繋がりが読み取れる。前期古墳をみると、吉島古墳（注28）・権現山51号墳（注29）からは、ヤマト政権と直結する三角縁神獣鏡が出土しており、これに加えて、権現山51号墳の特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪の存在は吉備との関わりをも示している。揖保川流域がヤマト政権と吉備勢力の両方が交錯する境界域であったことがわかる。また、龍子三ツ塚1号墳（注30）では「山陰型特殊器台形埴輪」とも呼ばれる「円筒形器台」が確認されている。揖保川を遡って吉島古墳の山麓を西へ進むルートは、美作を経て出雲や因幡へ向かう主要な陸路である（注31）。この地理的条件を考慮すれば、山陰地方との関わりを示す資料の存在が理解できる。朝臣1号墳の阿蘇溶結凝灰岩製環状把手付舟形石棺に至っては、遠く肥後までのびる海路の存在の証である。5世紀代において、ヤマト政権の勢力拡大と朝鮮半島への進出が海上ルートの整備を促したことは想像に難しくなく、揖保川流域は瀬戸内海航路に携わった人々の一大拠点であるとともに、他地域と頻繁な往来のあった地域といえる。

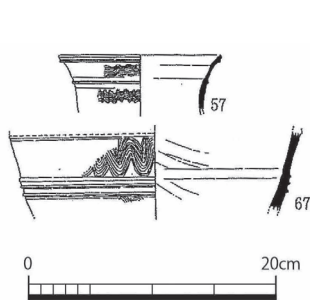
尚、西播磨では、蟻無山1号墳や宿禰塚古墳に初期須恵器がみられる。千種川流域の有年原・田中遺跡では5世紀初頭に遡ると考えられる須恵器や瓦質土器、韓式土器等が出土している（注32）。揖保川左岸・大津茂川流域の姫路市網干区関ノ口遺跡（注33）や前田遺跡（注34）では、近在の須恵器窯から供給されたと考えられる5世紀後半～5世紀末の須恵器の資料が増えている。したがって、西播磨における古手の須恵器窯として知られる相生市那波野丸山3号窯（5世紀末頃）や御津町碓岩南山窯A（中池窯・6世紀前葉）（注35）に先行する須恵器窯が存在していたことは明らかである。その規模はさほど大きなものではなく、操業期間も限られたものであったかもしれないが、宿禰塚古墳や朝臣古墳群の須恵器をみる限り、西播磨の初期須恵器の窯を営んだ須恵器工人は、材料の選別・成形・築窯・窯焚き等、須恵器生産全般にわたって高い技術をもっていたことがわかる。他地域から揖保川流域に往来した人々の中には、このような工人や渡来系の人々も含まれていたのである。

- (注1) 「初期須恵器」は、TG232型式、ON231型式、TK73型式、TK216型式、ON46段階に属する須恵器を指す。なお、これらの型式の年代や時期区分、編年については、第6章図1に引用した鈴木一有 2014「野中古墳の築造時期と陪冢論」『野中古墳と「倭の五王」の時代』〈大阪大学総合博物館叢書10〉高橋照彦・中久保辰夫 編 大阪大学出版会 など、鈴木氏の年代観に依拠している。したがって、TK216型式は概ね5世紀第2四半世紀に該当する。
- (注2) 和歌山県立紀伊風土記の丘 2014『須恵器—誕生新しい土器は古墳時代をどう変えたか—』では、甕体部外面のタタキメを消すものをTG232型式、タタキメを残すものをTK73型式と区分している。
- (注3) 上下の振り幅の小さな波状文と上下の振り幅が大きく「V」や「U」に近い雑な波状文を併せて、一体の文様を構成している。
- (注4) 中久保辰夫 2014「野中古墳出土土器の性格と意義」『野中古墳と「倭の五王」の時代』〈大阪大学総合博物館叢書10〉高橋照彦・中久保辰夫 編 大阪大学出版会 によると、組紐文は連続技法から分割技法へ変化する。野中古墳の須恵器にみられる組紐文はすべて分割技法で、TK216型式期と考えられている。
- (注5) 松本正信 1984「Ⅲ 龍野市とその周辺の考古資料 46) 宿禰塚古墳と周辺の古墳」『龍野市史』第四卷 龍野市史編纂専門委員会 編 龍野市、荒木幸治 2016「特別展 蟻無山古墳の時代—播磨に渡来人きたる—」『有年考古 第3号—赤穂市立有年考古館年報（平成26年度）—』〈赤穂市文化財調査報告書83 赤穂市立有年考古館報告書第3冊〉赤穂市教育委員会・赤穂市立有年考古館
- (注6) 荒木幸治 2011「第1章 蟻無山古墳群の測量調査」『蟻無山古墳群・塚山古墳群・周世宮裏山古墳群測量調査報告書』〈赤穂市文化財調査報告書73〉赤穂市教育委員会・(注5) 荒木2016
- (注7) ただし、第5章図1・4で紹介した分布調査時に採取された円筒埴輪の直径は、実測図によると25cm前後である。これについては、4号墳にも5号墳の埴輪に似た法量の円筒埴輪が存在しており、設置される位置によって大小の使い分けがあったと理解する他に、円筒埴輪とは法量の異なる朝顔形埴輪の円筒部の可能性も考えられる。
- (注8) (注5) 松本1984・荒木2016
- (注9) 赤穂市蟻無山1号墳の須恵器器台や赤穂郡上郡町竹万宮ノ前遺跡、たつの市小畑十郎殿谷遺跡出土の須恵器に施されている波状文は、陶邑窯跡群に類例がみられないとして、中久保辰夫氏が「回転力に頼ることなく、手首を上下に動かして流水文のように描いている」（中久保辰夫 2010「渡来文化受容の地域格差—古墳時代中期の播磨地域を中心に—」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 編）、荒木幸治氏が「流水文状の波状文」（注6）荒木2011）といった表現で特異性を指摘している。
- (注10) 荒木幸治氏は、(注6) 荒木2011並びに(注5) 荒木2016で、蟻無山1号墳の築造時期をTK73型式以前、宿禰塚古墳をTK216型式の築造とみている。本書では、この説に従う。
- (注11) なお、7号墳で外面のタタキメをナデ消した甕の体部片44や外面にヘラ描きによる斜格子文を施した壺体部片48を採取した中溝康則氏は、44はTG232型式の可能性があり、48は宿禰塚古墳出土の台付壺に似ていてその年代はON231型式に近い頃であるとして、7号墳を5世紀初頭の古墳に位置付けることを主張されている。しかし、外面にタタキメの残る甕片が複数存在しているので、この資料を無視して年代比定を行うことが適切とは考えられないことに加えて、宿禰塚古墳出土の須恵器の年代はTK216型式とみられることから、この説を肯定することはできない。
- (注12) 那波野丸山窯跡群には5基の窯の存在が知られている。須恵器と埴輪を併焼していたとされる3号窯は窯跡群では最も古くに操業された窯で、5世紀末頃の年代が与えられている（森内秀造 1989「埋蔵資料 二 窯跡資料 一七 那波野丸山3号窯跡」『相生市史』第五卷 相生市史編纂専門委員会 編 兵庫県相生市・相生市教育委員会、河原隆彦・河井孝幸・石塚太喜三 1992「199 那波野丸山窯跡」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県史編集委員会 編 兵庫県、山中良平 2019「播磨大陶器展」『有年考古 第6号—赤穂市立有年考古館年報（平成29年度）—』〈赤穂市文化財調査報告書89 赤穂市立有年考古館報告書第6冊〉赤穂市教育委員会・赤穂市立有年考古館）。この年代と朝臣山古墳群の埴輪の想定年代にはズレがあるが、西播磨地域の円筒埴輪の一形態と理解したい。
- (注13) 松本正信 1984「Ⅲ 龍野市とその周辺の考古資料 44) 輿塚古墳」『龍野市史』第四卷 龍野市史編纂専門委員会 編 龍野市、松本正信 1997「Ⅱ 考古学からみた御津町の原始・古代 4 前方後円墳の時代 ⑨輿塚古墳」『御津町史』第三卷 御津町史編纂専門委員会 編 御津町、岩本 崇・河野正訓・土屋隆史 2010「1 西播磨地域における前期古墳出土資料の再検討 ②輿塚古墳」『龍子三ツ塚古墳群の研究—播磨揖保川流域における前期古墳群の調査—』〈大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター報告9〉大手前大学史学研究所・龍子三ツ塚古墳群調査団 編
- (注14) (注6) 荒木2011
- (注15) 兵庫県教育委員会 1995『片島古墳群・片島遺跡発掘調査報告書—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XⅦ—』〈兵庫県文化財調査報告第143冊〉
- (注16) (注1) 鈴木2014

- (注17) 上田哲也・増田重信 1961「播磨御津町中島出土の特殊家形石棺」『古代学研究会、松本正信 1978「第2章 考古学からみた龍野 第3節 前方後円墳の時代」『龍野市史』第一卷 龍野市史編纂専門委員会 編 龍野市、松本正信 1997「Ⅱ 考古学からみた御津町の原始・古代 4 前方後円墳の時代 ⑩朝臣雛山出土舟形石棺」『御津町史』第三卷 御津町史編集専門部委員会 編 御津町、松本正信 2001「第二章 考古学からみた御津町の原始・古代 第五節 前方後円墳を築いた時代二」『御津町史』第一卷 御津町史編集専門部委員会 編 御津町
- (注18) 第1章第6節で述べているように、平成12年度のトレンチ調査によって前方後方墳であることが明らかになったが、その後、西播磨古墳時代研究会によって墳丘の測量調査が行われ、平面図が公表されている（岩井顕彦・松尾佳奈 2011「第1章 墳丘測量の成果 5. 朝臣3号墳」『揖保川流域の前期古墳—墳丘測量と出土遺物の再検討—』西播磨古墳時代研究会）。
- (注19) 松本正信 1997「Ⅱ 考古学からみた御津町の原始・古代 4 前方後円墳の時代 ⑪山王山古墳」『御津町史』第三卷 御津町史編集専門部委員会 編 御津町
- (注20) 御津町教育委員会 1971『綾部山古墳群調査報告書』
- (注21) 松本正信 1984「Ⅲ 龍野市とその周辺の考古資料 48) 小丸山古墳」『龍野市史』第四卷 龍野市史編纂専門委員会 編 龍野市、松本正信 1997「Ⅱ 考古学からみた御津町の原始・古代 4 前方後円墳の時代 ⑫小丸山古墳」『御津町史』第三卷 御津町史編集専門部委員会 編 御津町、松本正信 2001「第二章 考古学からみた御津町の原始・古代 第六節 民衆が古墳を築いた時代」『御津町史』第一卷 御津町史編集専門部委員会 編 御津町
- (注22) 岸本道昭 1985「西播磨地域の首長墓とその動向」『松岡秀夫傘寿記念論文集』『松岡秀夫傘寿記念論文集』刊行会 編 神戸新聞総合出版センター、西谷真治 1989「埋蔵資料 一 先史・原史時代資料 九 塚森古墳」『相生市史』第五卷 相生市史編纂専門委員会 編 兵庫県相生市・相生市教育委員会、岸本道昭 2013『古墳が語る播磨』神戸新聞総合出版センター、(注5) 荒木2016
- (注23) 岸本直文 1992「186 丁瓢塚古墳」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県史編集専門委員会 編 兵庫県、松本正信 2010「4 前方後円墳時代 Z28) 瓢塚古墳」『姫路市史』第七巻下 資料編 考古 姫路市
- (注24) 魚津知克 2017「『海』の古墳」研究の意義、限界、展望」『史林』第100号第1号〈特集 海〉 史学研究会
- (注25) 松本正信 1984「Ⅲ 龍野市とその周辺の考古資料 4 民衆墓と首長墓 32) 白鷺山箱式石棺」『龍野市史』第四卷 龍野市史編纂専門委員会 編 龍野市
- (注26) 兵庫県揖保郡御津町教育委員会 1997『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』、中溝康則 1998「西播磨における積石塚墳墓群について」『網干善教先生古稀記念 考古学論集』網干善教先生古稀記念会
- (注27) 揖保郡御津町教育委員会 2005『綾部山39号墓発掘調査報告書』〈御津町埋蔵文化財報告書5〉
- (注28) 近藤義郎 編 1983『吉島古墳』〈新宮町文化財調査報告書4〉兵庫県新宮町教育委員会、松本正信 1992「194 吉島古墳」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県史編集専門委員会 編 兵庫県
- (注29) 近藤義郎 編 1991『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会
- (注30) 大手前大学史学研究所・龍子三ツ塚古墳群調査団 編 2010『龍子三ツ塚古墳群の研究—播磨揖保川流域における前期古墳群の調査—』〈大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター報告9〉
- (注31) 吉島古墳は、揖保川の河口から15kmほどほど上流、標高200m以上の山上に位置していて、墳丘上からは揖保川流域や瀬戸内海を望むことができる。それに加えて、吉島古墳の南側で揖保川と西側から流れてきた栗栖川が合流しており、揖保川を遡れば但馬へ、栗栖川を西に辿れば美作へ向かうことができる。すなわち、吉島古墳は交通の要衝に立地している古墳である。
- (注32) 藤田忠彦ほか 1994「有年原・田中遺跡出土の初期須恵器と軟質土器」『韓式系土器研究』V 韓式系土器研究会、植野浩三 1994「兵庫県千種川中・下流域の初期須恵器」『韓式系土器研究』V 韓式系土器研究会、山中良平 2019「西播磨の須恵器生産—相生・龍野窯跡群とその周辺—」『須恵器生産からみた播磨』〈第19回播磨考古学研究会の記録〉第19回播磨考古学研究会実行委員会
- (注33) 姫路市埋蔵文化財センター 2017『関ノ口遺跡の調査』〈関ノ口遺跡第1次発掘調査現地説明会資料〉、同 2018「関ノ口遺跡」『姫路市埋蔵文化財調査年報2018』、同 2019『関ノ口遺跡の調査』〈関ノ口遺跡第5次発掘調査現地説明会資料〉、同 2020「関ノ口遺跡」『姫路市埋蔵文化財調査年報2020』ほか
- (注34) 兵庫県教育委員会・公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 2018『前田遺跡発掘調査説明会』・『前田遺跡7区・中筋遺跡6区発掘調査説明会』、同 2019『前田遺跡10区 7-D区 現地説明会資料』、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 2018『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』98号、同 2019『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』100号、同 2020『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡』101号、青山 航 2019「姫路市網干区高田の前田遺跡と中筋遺跡について—遺構の概要と遺物について—」〈考古学研究会関西例会217回例会資料〉、兵庫県立考古博物館 2020『ひょうごの遺跡2020—調査研究速報—』〈企画展リーフレット〉
- (注35) 上月昭信 2004『播磨地方における6世紀・7世紀の須恵器生産』私家版

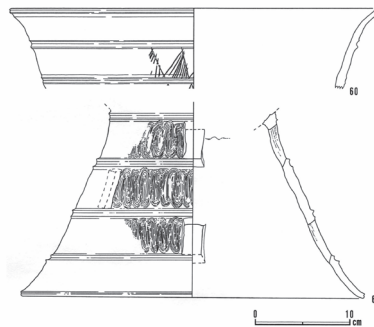
コラム2 見比べてみたい西播磨の須恵器

朝臣山古墳群のお膝元（朝臣オノ木遺跡）では、御津町最古クラスの須恵器が出土していて（図2）、波状文をもつ器台もある。また、文章だけではピンとこないのが、朝臣山古墳群の須恵器との比較検討の対象である蟻無山1号墳の流水文のような波状文の施された器台（図3）と宿禰塚古墳の格子文様のある台付壺（図4）の図も並べてみた。似てる、似てないの皆様のご判断は如何であろう？（文責：萬代）



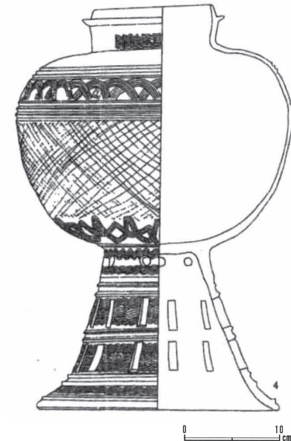
※中溝康則・芝香寿人 2005
「朝臣オノ木遺跡概報」から引用

図2 朝臣オノ木遺跡の壺・器台



※第1節（注6）『蟻無山古墳群・塚山古墳群・周世宮裏山古墳群測量調査報告書』から引用

図3 蟻無山1号墳の器台



※第1節（注5）『龍野市史』第四巻から引用

図4 宿禰塚古墳の台付壺

第2節 古墳築造工事の目安

朝臣4号墳・5号墳は前山山頂（図6）にあり、稜線を意識して築造されたと考えられる。そして、接近して築造されている両墳は密接に関連していて、両墳の基盤を考慮すると、4号墳が先に築造され、後に5号墳が築造されたと考えられる。

4号・5号墳を図6で想定した仮主軸で切って作成した縦断面図に築造前の自然地形を模式的に想定し、直線に近似して図示した（図5に地盤線で表現）。その上で、盛土・切土の作業量を検討し、各古墳に係る築造日数の概略を計算する。また、盛土に必要な土は、地形を考慮して5号墳と6号墳の間の尾根上から採集したものと想定する（図6に「土取場」と表記）。そして、『播磨国風土記』に揖保郡に18の里があり、養老令（718年）の戸令は50戸で一里としているので、古墳群のある石海の里も50戸として、一日に動員できる最大の人数を50人とみなす。ただし、作業範囲・作業量を考慮し、一日に必要な人数を決め、築造に必要な作業日数を算出する。なお、土取場・墳丘ともに地形や作業スペースの確保などを想定してその範囲を方形と仮定する。また、墳丘の盛土や墳形を整えるための切土の土量は、図5を基に墳丘の断面積の数値を得て、図6に示した仮主軸に直交する東西方向の距離を用いて、断面積（ m^2 ）×東西方向距離（ m ）÷2で近似計算し、さらに現地での予期せぬ作業量の追加を考慮し補正（×1.2）を行う。

作業日数は、国土交通省及び兵庫県の基準により歩掛を用い算出する。また、労務単価は、作業内容にかかわらず同一とし、2020年の市況から19,200円/日と仮定した。

1) 朝臣4号墳について

築造前の下刈り面積

土取場	$50\text{m} \times 40\text{m} = 2,000\text{m}^2$
墳丘	$60\text{m} \times 60\text{m} = 3,600\text{m}^2$
合計	$5,600\text{m}^2$ (0.56ha)

下刈りの作業

下刈り人数	$0.56\text{ha} \times 1.59$ (補正) $\times 17\text{人/ha} \approx 15\text{人}$
-------	--

築造に係る土量

必要な土量	$138.7\text{m}^2 \times 48.0\text{m}$ ($25.5\text{m} + 22.5\text{m}$) $\div 2 = 3,328.8\text{m}^3$
補正土量	$3,328.8\text{m}^3 \times 1.2 \approx 3,995.0\text{m}^3$

土取場の作業

掘削人数	$3,995.0\text{m}^3 \times 0.39$ 人/ $\text{m}^3 \approx 1,558\text{人}$
------	---

※切土量は少量なので、ここでは無視する(約 72m^3)。

墳丘築造の作業

切土作業人数	$72.0\text{m}^3 \times 0.39$ 人/ $\text{m}^3 \approx 28\text{人}$
小運搬人数	$3,995.0\text{m}^3 \times 0.37$ 人/ $\text{m}^3 \approx 1,478\text{人}$

※土取場から墳丘築造場所への小運搬距離は80mとみなす。

敷き均し(築造)の人数	$3,995.0\text{m}^3 \times 0.23$ 人/ $\text{m}^3 \approx 919\text{人}$
合計(延べ人数)	2,425人

全作業人数

$$\text{(下刈りの作業人数)} + \text{(土取場の作業人数)} + \text{(墳丘築造の作業人数)}$$

$$15\text{人} + 1,558\text{人} + 2,425\text{人} = 3,998\text{人}$$

全作業日数

$$3,998\text{人} \div (50\text{人} \times 3/4) \approx 107\text{日}$$

※一日に必要な人数を $50\text{人} \times 3/4 = 37.5\text{人}$ とみなす。

築造にかかる人件費

$$19,200\text{円} \times 3,998\text{人} \text{ (全作業人数)} \approx 76,762\text{千円}$$

2) 朝臣5号墳について

築造前の下刈り面積

土取場	$30\text{m} \times 40\text{m} = 1,200\text{m}^2$
墳丘	$40\text{m} \times 40\text{m} = 1,600\text{m}^2$
合計	$2,800\text{m}^2$ (0.28ha)

下刈りの作業

下刈り人数	$0.28\text{ha} \times 1.59$ (補正) $\times 17\text{人/ha} \approx 8\text{人}$
-------	---

築造に係る土量

必要な土量	$34.5\text{m}^2 \times 26.5\text{m}$ ($13.0\text{m} + 13.5\text{m}$) $\div 2 = 457.125\text{m}^3$
-------	---

補正土量 $457.125\text{m}^3 \times 1.2 \div 548.5\text{m}^3$

土取場の作業

掘削人数 $548.5\text{m}^3 \times 0.39 \text{人}/\text{m}^3 \div 214\text{人}$

墳丘築造の作業

小運搬人数 $548.5\text{m}^3 \times 0.32\text{人}/\text{m}^3 \div 176\text{人}$

※土取場から墳丘築造場所への小運搬距離を50mとみなし、必要な人数を4号墳より少なく想定。

敷き均し（築造）の人数 $548.5\text{m}^3 \times 0.23\text{人}/\text{m}^3 \div 126\text{人}$

合計（延べ人数） 302人

全作業人数

（下刈りの作業人数） + （土取場の作業人数） + （墳丘築造の作業人数）

8人+214人+302人= 524人

全作業日数

$524\text{人} \div (50\text{人} \times 2/4) \div 21\text{日}$

※一日に必要な人数を $50\text{人} \times 2/4 = 25\text{人}$ とみなす。

築造にかかる人件費

$19,200\text{円} \times 524\text{人（全作業人数）} \div 10,061\text{千円}$

3) まとめ

古墳の築造に関わる、延べ人数・作業日数・費用を現在の人力のみの試算方法を用いて算出した。その結果、4号墳は延べ人数3,998人・総作業日数107日・総費用76,762千円、5号墳は延べ人数524人・総作業日数21日・総費用10,061千円となった。尚、調査は平板測量のみで、トレンチ調査等を行っていないため、盛土量についてはあくまで想定である。また、葺石や列石は考慮していない。さらに、埴輪製作や樹立作業、主体部（おそらく竪穴式石槨と想像）構築などの作業も必要であるが、これらは除外した。さらに、現在の組織では直接・間接経費並びに交通費・消耗品費などと、設計費・管理費・保険等の経費が発生するが、ここでは、直接の作業費用のみとして、今後の作業資料として提示する。

当時築造に関わった人々の報酬は不明である。時期ごとの列島内での地域性・古墳の規模や埋葬施設・埋葬品のはやりがあるが、弥生時代から各地で各種墳墓が作られ、実に400年間も続いた古墳時代を考えると、築造に関わった人々に対しては、強制労働とは考えにくい。その時代の背景と、人々の心情や報酬が何であったかが気になる所である。

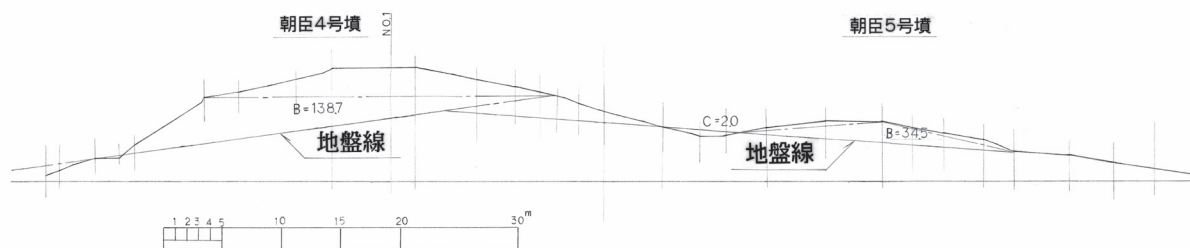


図5 古墳の築造に関わる縦断面図

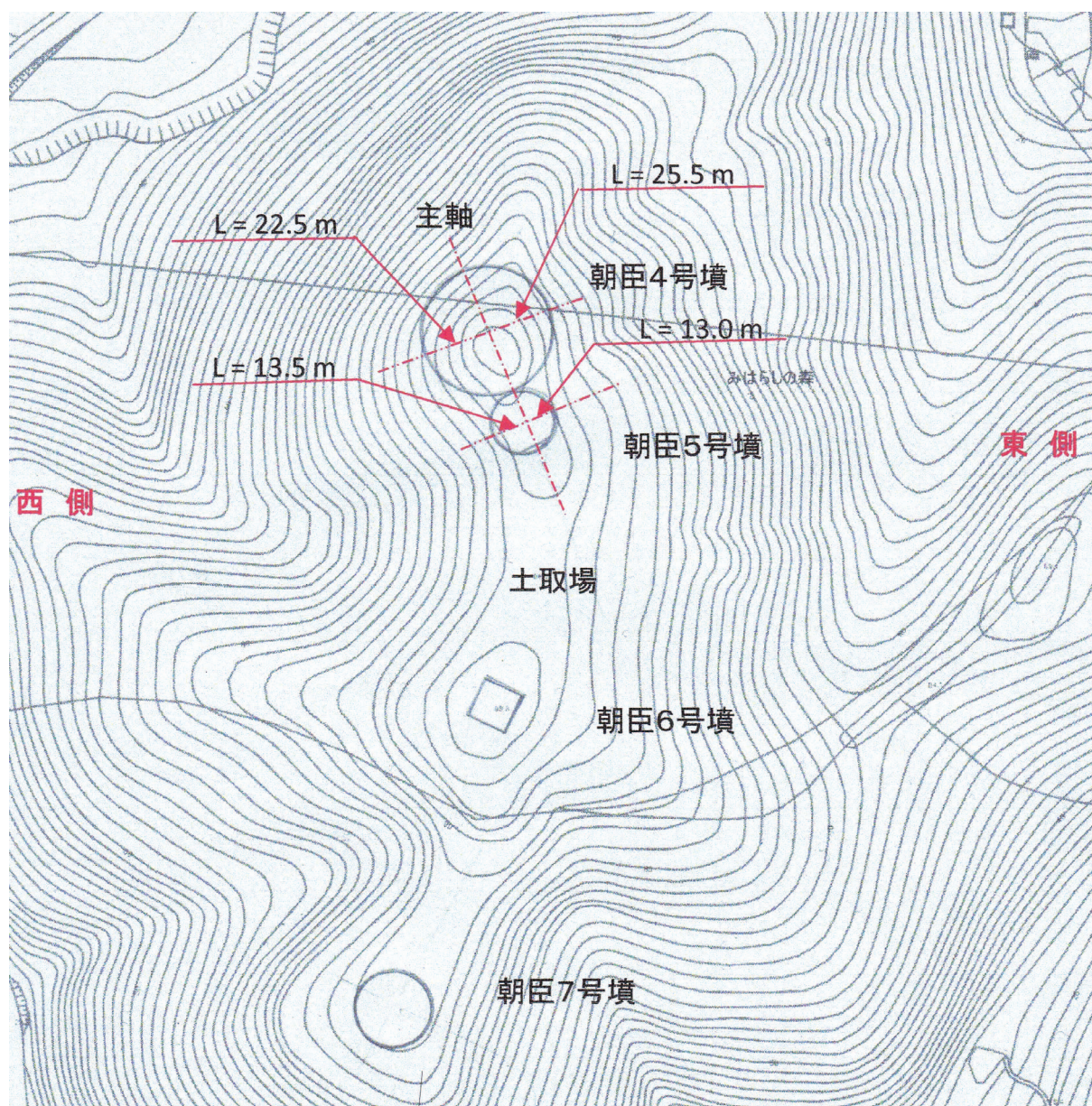


図6 古墳の築造に関わる位置図

第3節 近接する2基の古墳と近年発見された前方後円墳

朝臣4号墳と5号墳は、測量からは前方後円墳とはならないと判断したが、揖保川流域には、近接する2基の古墳が前方後円墳や前方後方墳に相違する「二個一」のものが散見される。又、過去に盗掘を受けた古墳や、記録なく消滅した古墳の中に、前方後円墳や前方後方墳と伝えられているものもある。西播磨では過去に墳丘測量を行った古墳、部分発掘調査をした古墳、全面発掘調査をした古墳等があるが、事例は数少ない。朝臣4号・5号墳や「二個一」の古墳の中には前方後円墳・前方後方墳が含まれているのではないだろうか。確認調査・発掘調査は行っていない為、結論は後世に委ねることとする。

ここでは「二個一」のもの、確認調査で前方後円墳になった古墳、新規発見された前方後円墳を紹介する。

1) 綾部山古墳群2号・3号墳、11号・12号墳、13号・14号墳

図7は御津町黒崎の綾部山梅林内にある綾部山古墳群分布図である。現在40基まで数えるが、昭和46年（1971年）当時は31基の確認であった。

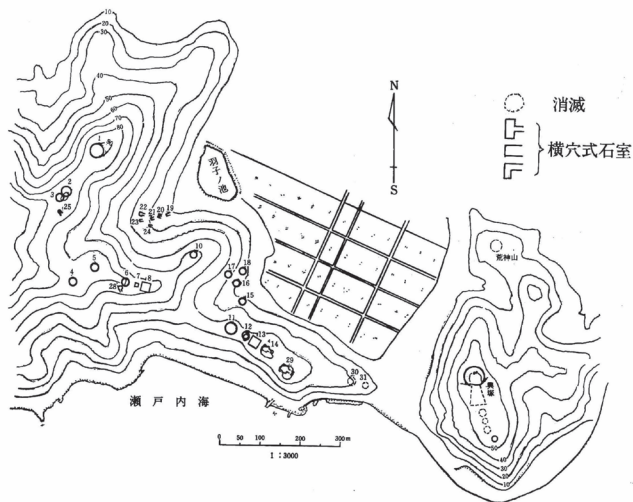


図7 綾部山古墳群古墳分布図

図8は2号・3号墳の測量図である。図7の北西端にある1号墳より南に位置し、2基とも埴輪と葺石を伴う。3号墳では須恵質埴輪もあって、2号墳は二段築成で、2号墳を後円部とする前方後円墳のようにもみえる。3年前に現地視察の機会があったが、47年前と比較すると、人の腰くらいの高さであった梅の木々は成長して老木となっていたが、古墳は当時のままであった。どちらも円墳で古墳時代中期と考える。

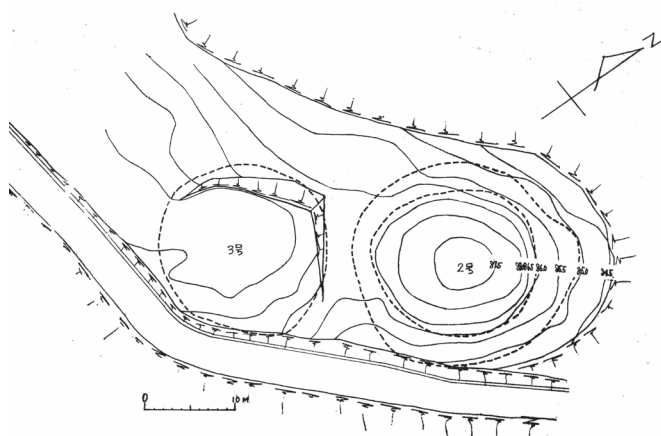


図8 綾部山古墳群2号・3号墳測量図

図9の11号・12号墳は、綾部山南東部尾根上に位置する。西側の11号墳を後円部とする前方後円墳に似ているが、どちらも葺石をもつ円墳である。12号墳は埴輪片が採取されていて古墳時代中期と考える。

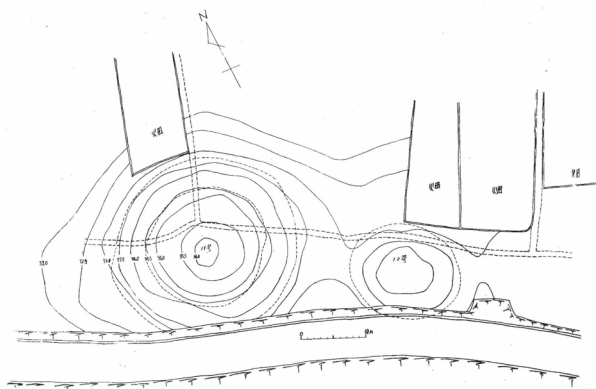


図9 綾部山古墳群11号・12号墳測量図

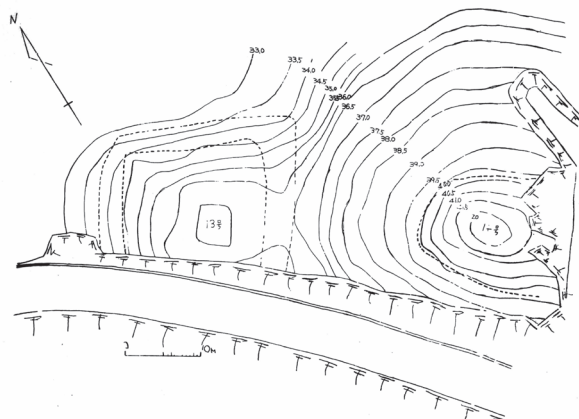


図10 綾部山古墳群13号・14号墳測量図

平成3年（1991年）にゴミ捨て場を作るため西側と北側が破壊された。14号墳は中期の前方後方墳だが、1971年以前に前方部が破壊され、後方部しか残っていない。後方部から甲冑がでたとされている。したがって、13号墳と14号墳は明らかに別々の古墳である。

尚、綾部山古墳群の分布図（図7）には、14号墳の東側に前方後方墳であった綾部山29号墳が記されているが、14号墳の前方部と同時期（1971年以前）に消滅してしまったのが悔やまれる。

3組の古墳を紹介したが、2号・3号墳と11号・12号墳は個別の円墳であるが、測量図を見ると前方後円墳に見えるほど近接して築造されていて、系譜や占地などに相互の関係（親子・兄弟か）が想定できる。13号墳は方墳、14号墳は前方後方墳と登録されている。13号墳は許可なしにゴミ捨て場を作られたため緊急調査されたが、他は平板測量のみである。

参考文献：御津町教育委員会 1971『綾部山古墳群調査報告書』、 芝 香寿人・中溝康則 1997『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』御津町教育委員会、 松本正信 1991『綾部山13号墳緊急調査実績報告書』綾部山13号墳緊急調査団

2) 養久山12号・13号墳丘墓

養久山には旧揖保川町と旧龍野市（現在はともにたつの市）の境となる東西2kmの稜線上に43基の墳墓群が築かれている。1967年3月から1968年8月に墳墓群が発掘されたが、13号墓とそれに隣接する12号墓は地形測量図を見ると、前方後方形の弥生墳丘墓のように思える（図11）ため紹介する。

12号墓には5本のトレンチを設定して観察されたが、13号墓は、測量のみである。12号墓の主体部は遺物のない土壙墓と壺棺の二つで、周溝状遺構内から多数の土器片が出土したが、列石等の墳丘形状を確定できる材料がなく、墳形は円形・方形のいずれとも決しがたいとの報告である。また、13号墓と12号墓の中軸線を延長するも、わずかにずれがあるので、同一の墳丘墓とするには根拠が弱い。

参考文献：松本正信 1991「第4章 養久山12号墳丘墓」『養久山墳墓群』兵庫県揖保川町教育委員会

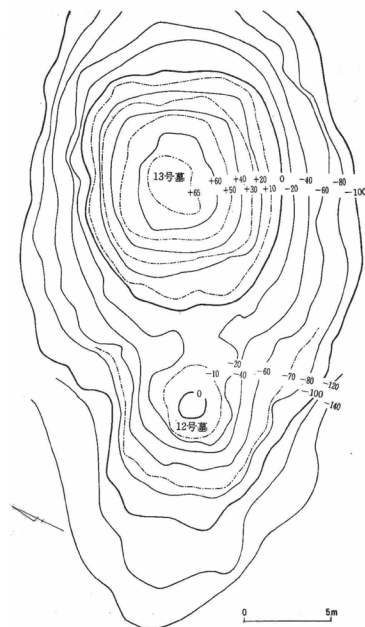


図11 養久山12号・13号墓測量図

3) 中山13号墳

赤穂郡上郡町高田台に中山古墳群があり、すぐ北には古代山陽道と高田駅家が位置する。昭和46年（1971年）から47年（1972年）に5次に渡り調査され、中山13号墳は径15.3mの円墳、15号墳（後に13号墳の前方部）は径13mの円墳と報告書に記載されている。範囲確認調査のため、13号・14号・17号墳の調査が平成18年（2006年）度から平成20年（2008年）度にかけて実施された。

その結果、従来別個の古墳として登録されていた13号墳と15号墳は、中世段階に砦跡に使用され、地形改変されているが、全長59m（13号墳が後円部、15号墳が前方部）の千種川流域最大最古の前方後円墳であることが判明した。（図12）

参考文献：松岡秀夫 1973『中山古墳群調査報告』西野山古墳発掘調査研究会、 島田拓 2013『中山古墳群 範囲確認調査報告書』上郡町教育委員会

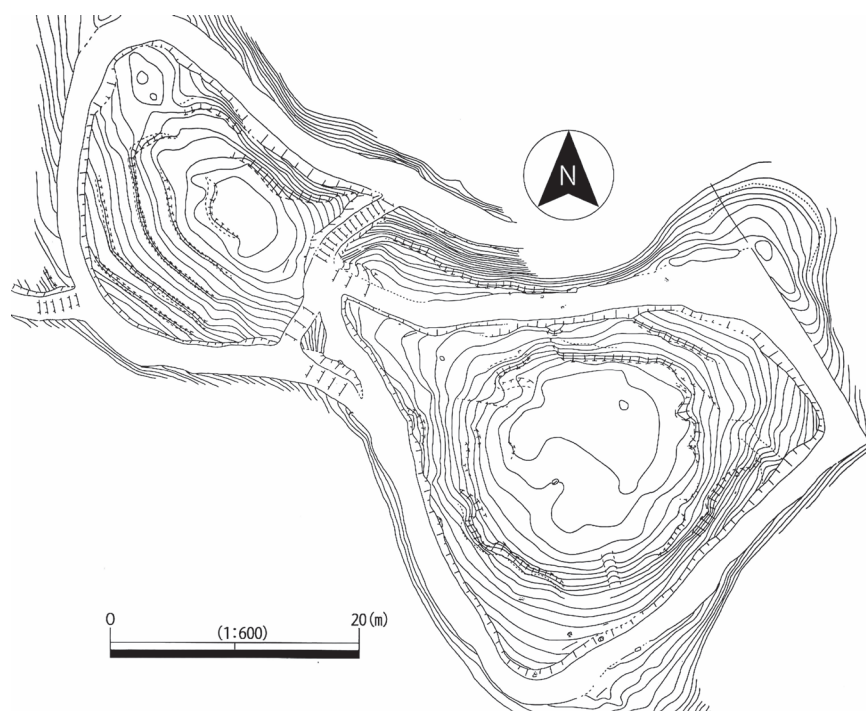


図12 中山13号墳測量図

4) 放亀山1号墳

赤穂市有年地区では、昭和43年（1968年）度に分布調査を実施して以来、50年近く分布調査が行われていなかった。平成25年（2013年）度より文化財の実態を把握するため、改めて分布調査が実施されたところ、有年原及び有年牟礼地区の山間部には、156基に及ぶ古墳をはじめとする各種文化財が確認された。また、放亀山古墳群は古墳時代前期から終末期まで、14基の古墳からなる古墳群である。その中で従来円墳とされていた1号墳は全長38mの前方後円墳と確認され（図13）、赤穂市初の前方後円墳となった。土器は出土したが埴輪は見られず、千種川沿いでは3)の中山13号墳（上郡町）に次ぐ規模で、中山13号墳よりはやや新しい前期古墳と位置づけられた。

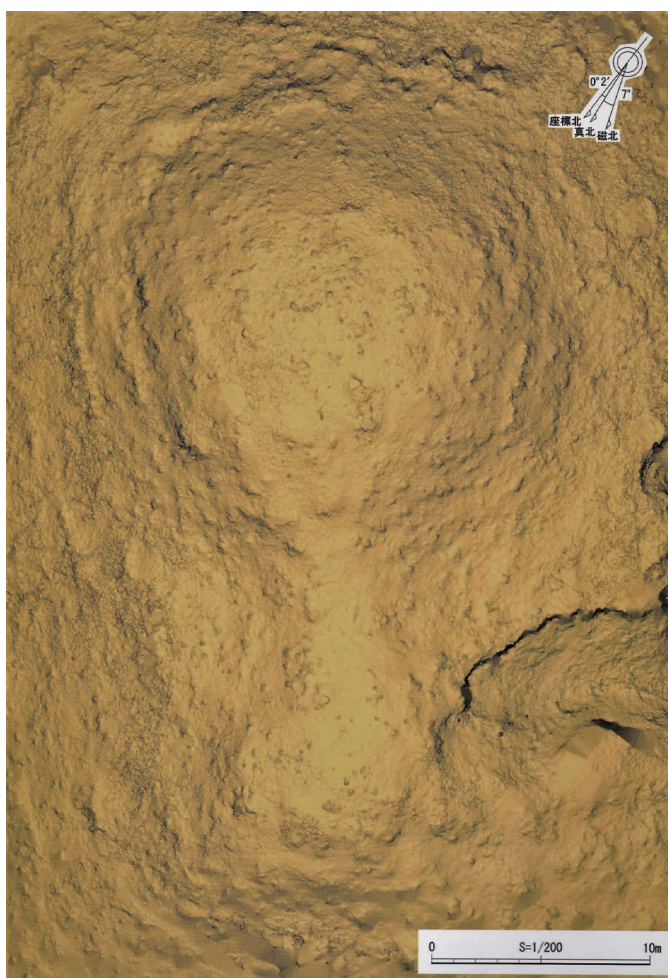


図13 放亀山1号墳3次元モデル

参考文献：兵庫県赤穂市教育委員会 2019
『放亀山古墳群調査報告書』

5) 甲崎古墳

相生市相生字甲崎（IHI構内）で新発見された前方後円墳である。相生市教育委員会が2019年度に市広報で発表し見学会も実施して、2020年度に正式に平板測量を行う予定。

詳細は、兵庫県立考古博物館（播磨町大中遺跡内）ボランティアでつくる、ひょうご考古楽倶楽部の月一回の会報（2020年2月号・No.196）に掲載した見学会参加の記事（図14）に譲る。



速報 相生で未知の前方後円墳発見！
12期生 萬代和明

昨年、相生市で新たに前方後円墳が発見されて、見学会が1月10日に開催されました。この古墳はIHI播磨事業所構内にあり、相生市が企画した見学会でした。

古墳は、字名より「甲崎古墳」と名づけられました。全長約49mの前方後円墳であり、立地条件・形状・遺物（なし）等総合的に判断し、前期古墳と位置づけられています。

弥生墳墓から古墳に関心が強い私は、必ず現地を訪れ、自身で判断することを信念としており、見学前夜は眠れなかったが、事前に地形を確認し見学会に参加しました。

発見のきっかけは、国土地理院がホームページ上に公開している傾斜量図（カシミール3D）の観察により、藤原好二氏（倉敷埋蔵文化財センター・中国四国前方後円墳研究会会員）が指摘したことによるものです。

現地を訪れ立地を確認したところ、相生湾に入り込んだところに出っ張る標高75mの尾根にあり、南に播磨灘を見下ろし、東は旧相生村が一望でき、北は現在の相生市中心部が一望できる場所がありました。古墳まで登る途中は戦時中に開墾された畑跡が続きますが、古墳は開墾から免れて保存状態は良好でした。埴輪は置かれていなくて形状などから

前期（4世紀）古墳と判断されているが、前期でも古い時期ではないかと感じました。

参加者総勢20人のほとんどが相生市在住の方々の、湾の奥にはカブトガニが生息し、現在の中心部（相生市役所あたり）は大正時代まで海水が入り込む入江であり、南北道は川を埋めて作られたことを話の中で知りました。

市域で4例目の前方後円墳と位置付けられたが、今後の活用を見守りたいと思っています。



なお、古くに御津町により分布調査（363ヶ所）した遺跡のうち、2基の円墳が前方後円墳（全長約75m位）となる可能性に向け、1年前より各種資料集め・手続きをし、地元住民と共に測量がスタートしました。また新たな報告が出来るかもしれませんので、楽しみにしておいてください。

図14 甲崎古墳紹介文

6) 仮称：武山古墳（武山城跡）

図15の古墳は武山古墳と仮称する。御津町黒崎字武山に位置し、5)の図14と同じく、藤原好二氏より該当の自治体であるたつの市に連絡があり、旧揖保郡御津町関係者に問い合わせがあった。武山城跡で埋蔵文化財として周知された場所で、文化財保護の観点からは問題ない。しかし、拳大の円礫があちらこちらにみられたので、古墳の可能性は意識されていた（芝香寿人氏談）。

前方後円墳である可能性が考えられたので、昨年、数名で現地の視察を実施したところ、円筒埴輪片を表採した。私も埴輪片を表採したが、墳丘西側の南西端と両側面には、コの字状に拳大の円礫葺石が大量に残り、北東にも葺石が多く認められたことから、全長約80~90mの前方後円墳（図15）であることが明らかになった。

西南西約650mに位置する輿塚古墳（全長110m・前期後半）に用いられている葺石が同様の円礫である。埴輪片は“川西編年Ⅱ期”とみられるので、輿塚古墳と同時期もしくは先行する可能性を秘めている。海上交通の玄関口に位置し、各地からの交流（人とモノ）が気になる所である。

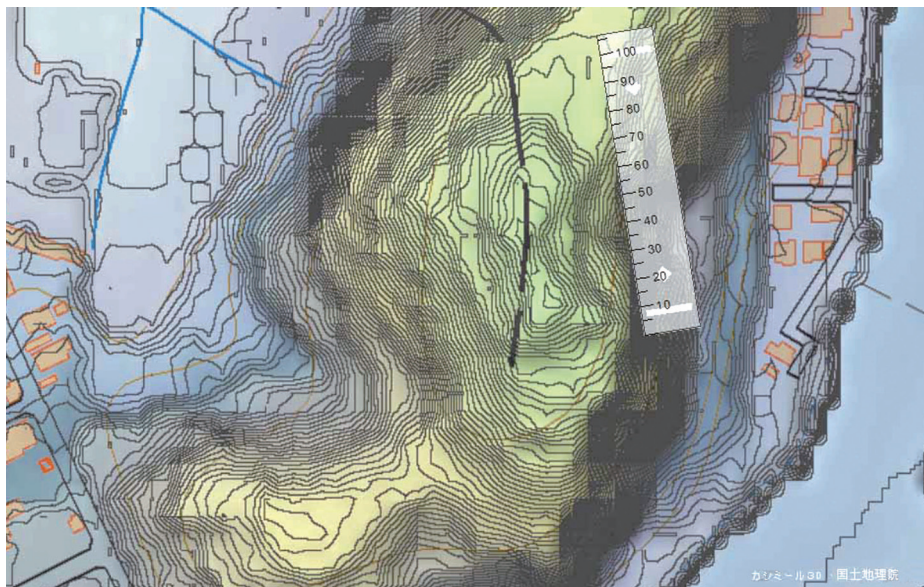


図15 武山古墳地形図 石黒 始氏作成（基盤地図情報5mメッシュ：等高線0.5m間隔）

今後、たつの市において地権者・黒崎自治会などとの協議の上、荒れはてた竹藪の整備と調査を期待したい。尚、その折は惜しみなく手弁当での参加も考えている。

7) 仮称：原山古墳

この古墳も前項5)・6)と同じく、藤原好二氏より該当の自治体の高砂市教育委員会に連絡があり、現地視察したところ、ほぼ前方後円墳であることを確認したとのことである(図16)。今後、古墳の平板測量を計画中とのことである。

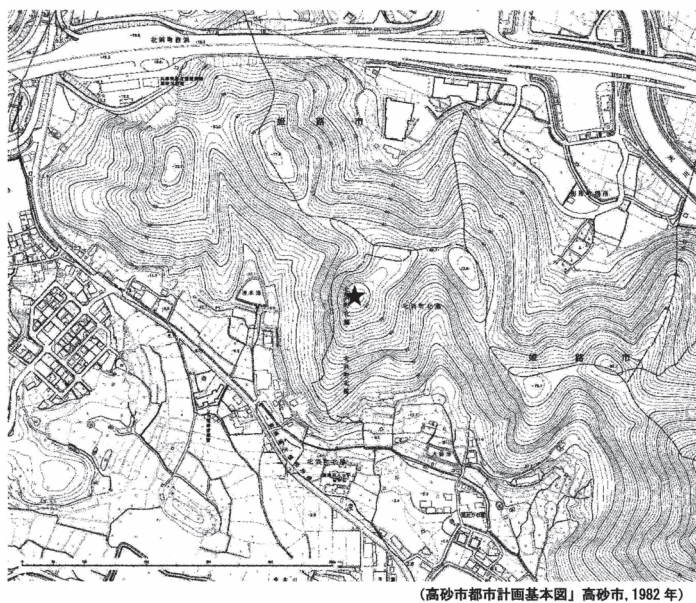


図16 原山古墳位置図 高砂市教育委員会生涯学習課より提供

図16にあるように、この古墳は高砂市北浜町の平野が入り込んだ山頂(字原山)にあり、山裾近くまで当時入江が迫っていたと想像する。

以上、近隣7場所13基の古墳の紹介を行った。冒頭で述べているように「二個一」の古墳が、個別の2基の古墳との報告であったり、前方後円墳・前方後方墳であったり、発掘により前方後円墳になったりと色々なケースがある。この度、報告した朝臣4号・5号墳についても「二個一」であると判断した。しかしながら、朝臣4号墳は50mの円墳

で首長墓と考えてよい。首長墳は単独築造の可能性が高いだけに、略方墳の朝臣5号墳とは3mしか離れていない点が不自然である。もし同一ならば80m前後の前方後円墳となる。

近年、最新技術により中・大型の前方後円墳などの新規発見も続いているので、播磨の古墳編年の更なる見直しが必要になるだろう。又、海上交通・河川交通による列島各地との交流に加えて中国大陸・朝鮮半島との往来を紐解くことに繋がる可能性がある(大きな研究課題であるが、それらは各行政の理解のもと専門職員を中心に、考古学に携わるすべての研究者に委ねたい)。